川柳雑誌

麻生路郎★主宰

二月號

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.345

昭和五年二月一日發行第十一卷第二號（毎月一回發行）創刊大正十三年四月卷・三百四十五號

二月号目次

題字……麻生路郎
表紙……米田三男之介
親娘対談……葭乃・梨里…(四)
幸福を幸福に……戸田古方…(一六)
高橋操子さんを訪ねて……丸尾潮花…(二二)
新川柳鑑賞……麻生路郎…(二二)
粗影の句……安川久留美…(二三)
わしが国さで……河村日満…(二六)
生活断片……長野文庫…(二七)
長壽談義……東野大八…(二一)
柳友半仙氏を憶う……浜田久米雄…(二四)
源平記箕間独語……鞍馬…(二五)
源頼政……富士野鞍馬…(二四)
テレビ……福田妄夢…(二七)
声……酒井ひか平…(二八)
鏡と女性……伊藤定美…(二一)
BK放送川柳……麻生路郎選…(二五)
社の黒板……(二三)

★

不朽洞句帖……麻生路郎…(三)
川柳塔……麻生路郎選…(六)
同舟近詠……諸家…(一〇)
近作柳樽……麻生路郎選 北川春巣選…(一六)
一路集「陳情」「預金帳」……戸田古方選…(二二) 田中鳥雀選…(二三)
金泥集……麻生葭乃選…(二五)
各地柳壇……(二九)
川柳第二教室 作句指導……戸田古方…(一四)
不朽洞会から……(二四)
柳界展望……(二八)
公私雑記……(三四)

本社二月耐寒句會

名句に接すると心温るものがあります。寒い二月の冬空も皆様の熱吟でふっとぶ事でしょう。朗らかにそして元気に句作して下さい。

日時　二月十一日(土)午後六時
場所　光明寺
　　大阪市天王寺区下寺町二丁目市バス停前
　　(市電下寺町又は日本橋三丁目下車)
兼題　「馳足」(二句)麻生路郎選
　　「温泉」(三句)北川春巣選
　　「瓦斯」(三句)黒川紫香選
席題　三題(当日発表)　麻生路郎　戸田古方
柳話
句評
呈賞　★各題天位　★路郎選天位に不朽洞賞
会費　五拾円

幹事　紫香・淡舟・賀峯・いさむ・凡九郎・白水・雄声

川柳雑誌社句會部

学生教養新書　全五十巻
日本図書館協会選定図書

麻生路郎著
川柳とは何か
—川柳の作り方と味い方—

二五〇円　送三二円

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。その川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、及びその作り方と味い方を柳壇の第一人者が五十余年間の実作者としての尊い経験を生かして最も平易にわかり易く説かれた斯道最適の案内書。

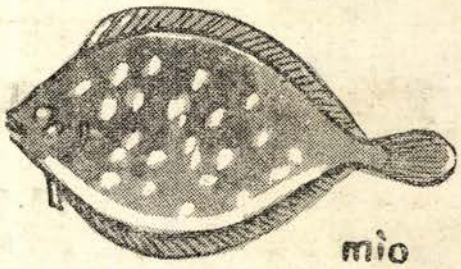
取次所　川柳雑誌社

至文堂
東京都新宿区払方町

不朽洞句帖

麻生路郎

名が売れただけで淋びしいことないか
恩師いつしか踏台にされ
大工さんも背広で来ると僕という
あんな阿呆にもファンが出来てる
人気あるうちに借金すすめられ
胃癌らしいとは近ごろ金が出来
銀行をいつぱいかける智慧も持ち
奥さんの方の俳句がうまいので
一周忌近いに形見分けでもめ
閑なのか刑事刑事の裏話
画の方で知られ患者が来てくれず



親娘對談

麻生葭乃

麻生梨里

思索作家と經驗作家に就て

梨里＝今日は二人で云いたいことを自由に喋ることにしましょか。

葭乃＝云いたいことは云いにくいものやなァ。（笑声）

梨里＝それもそうね。じやァ最初は一月号の川柳塔の中から一句拾うことにしては？

葭乃＝望峰さんの句で

御堂筋巾見なおしている夜明け

と云うのが出ていますが、御堂筋と云うものをよく見ていますね。昼間は交通が繁しくて街の巾を感じると云うことは考えもつかぬ処です。静かな夜明けの御堂筋がよく出ています。

梨里＝写生句ですね。「巾を見なおす」と云うことによって単なる叙景と違った写生句になっているのでしょう。御堂筋を的確に捉えています。こう云った句は所謂穿ちの句に比べると、うまく表現出来た場合はよろしいけれども、どうかすると川柳的表現から外れ易いのですがね。そこで私は大体川柳作家を大別すれば、主として穿ちの句を得意とする経験作家と、思索的作家とに別けられると思いますが、大体川柳は実作主義でゆく方が勝目がありそうですね。思索的な句で優れた句を作ることはむつかしいですものね。

葭乃＝実作主義でゆこうと思えば、どうしても体験が豊富でなければならない。勿論表現の技巧と云うものも必要ではあるが、実作主義で行こうと思うと体験がプァであれば、さっぱりものになりません。それで体験の少いものは、どうしても思索的な作法になる傾向があります。

梨里＝勿論思索作家と云っても、やはり何等かの身辺に起った事を詠んでいるには違いないのですが、そう云う体験の狭さが表現の上にも現われて、表現が抽象的になると云うのが欠点なのでしょう。そう云う意味で女の人の句は稍々抽象的であったり、感傷的であったりする嫌いがあるのですね。私なども常に作句上にそう云う悩みを感じるのです。表現が具体的でなければならないと云うことは、川柳の場合、最短詩型であることと、生活に密接した詩であるために、必要条件だと思うのですが、やゝもすると具体性に欠けるのです。

葭乃＝一概に抽象的表現がいけないとも云えないけれども、余程気をつけないと具体的表現の句よりも印象が不明瞭になるのです。抽象的な句は用語も自然抽象的な言葉になるからです。例えば親切とか、悩みとか言う言葉は、一度親切な行いを想像してから、或は色々な悩みの状態を考えてみてから、初めて人の頭の中に入って来るので、一度飜訳するまでの時間がかゝるから印象が不明瞭になり易いのです。

梨里＝詰りね、誰が云ったのか忘れたけれども何処かの国の哲学者だったか「恋愛は美しき誤解である」と云っているのですが、そんなやゝこしいことを云わなくても、「あ

ばたもえくぼだ」と云えば、そのものずばりで、ピンと来るのですよ。だから文学はそう云う具体的な表現で相手に早く自分の思っていることを理解して貰う事が必要なのだと思いますね。それからもう一つの欠点は抽象的な用語を用いると悲しいとか、嬉しいとか、美しいとか言い切ってしまうので余韻の残らない句になり勝なのです。

葭乃＝思索作家と云っても、その腕前はピンからキリまであって、中には抽象的な辞齣を用いていながら、印象不明瞭な句に陥らずに実に鮮やかな手際を見せている作家もあります。そう云う作家は実に多方面に読書をしています。その読書から得た知識が血となり、肉となって、巧みな比喩や、美しいリズムを調味料として作句しています。経験作家が、体験の多いように、思索的作家は知識と辞齣のストックが必要です。

梨里＝つまり、思索的作家は余程勉強しなければいけないわけですね。狭い体験の限られた範囲の中から詠出する句を表現の力で人を感動させるような句にしなければならないのですものね。

葭乃＝思索作家と云えば先ず丹路さんの句ですが、そのうちでも思索的なものを挙げてみましょう。

死んだふりして蜘蛛よ淋しがらすな

風よ吹け〳〵風の中なるひとりぼち

キリストは答えず夏の陽の瓦

同じ嘘なら絢爛たる嘘をつけ

石ければ秋の音してころびゆく

怒りとはさびしきものをもつものよ

春なれば春の姿の令夫人ともだちの現れでは消ゆ雲のごと

などがあります。

梨里＝水客さんも思索的な句が多いですね。

葭乃＝そうです。だけれど丹路さんが純思索的であるのに比して水客さんの句は思索的なものを、やゝ具体化した表現をとろうとしていられるように感じられますね。

梨里＝然しそれは一つの表現力であって、経験作家の具体的表現とは違う。思索表現の具体化であって、やはり思索的な句だと云えると思う。思索作家と云っても表現の上に具体的なものを持って来ることが、表現技巧なのだと思うのです。

葭乃＝そうです。水客さんは経験作家だとは云えません。

梨里＝水客さんの句では手近かな処で一月号の川柳塔

ラッシュにはラッシュの顔を持っている

これどう思う？

葭乃＝思索的分野の句ですね。

梨里＝二句目の句は穿ちだけれど、三句目の

秋がゆく氣配をおんな帯に見せ

これは表現方法に具体化をみせているが矢張り思索的でしょう。これ位にして、今度は経験作家の句を一つ……

葭乃＝経験作家の方は良い作家が沢山ありますが、今思い出したのを少し挙げることにします。

飲まされて味方を売って歸って来（没食子）

超然と派閥の外にいて端役（同）

雪かいなもう呑む腹で休む腹（同）

万障繰合せてロハの席に行く（同）

つぎ込んだ税吏がプイと転任し（同）

税務署にだれぞ知り合いないかいな（同）

○トレルマデカエルナと部長から（好郎）

団体だつかと女中立つたまゝ（同）

万事ＯＫ二つ返事が支払わず（文蝶）

儲からぬ受話器はガチヤリ音を立て（小松園）

泥棒の逃げた窓から首を出し（同）

病名に觸れずリンゴを置いて来る（淡舟）

あきまへんやろかと借金（同）

気が弱し

気前よく腹の痛まぬビール拔く（梅里）

命まで賭けた女てこれかいな（同）

まだ〳〵ありますがこれ位にしておきましょう。

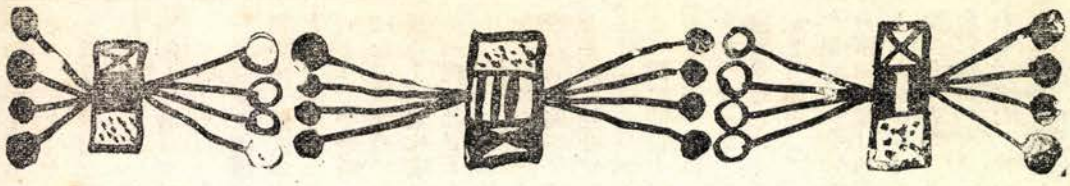
梨里＝「命まで」の句ね、「これかいな」と云う表現が、経験作家でないと出来ませんね。詰らない女だと云ってしまったら、それこそ没になるような詰らない句になってしまう。そう云う処が経験作家の強味ですね。詰らないと云うことを何か的確な形容詞でも持って来れば別ですが……。

葭乃＝要するに経験作家には経験作家の良さがあり、思索作家には思索作家のよさがあるのです。何れにしても、偽わらざる実際を詠むようにしていると、カラーや特徴が出て来る様に思います。だから忠実に自分の職務や身辺を詠んでいる人は早くカラーの出た作家になっている様に思います。

梨里＝つまり勉強をせよと云うことですか。耳が痛いですね。この辺で打切ることにしましょう。

（ＰＯＥ筆記）

全身に活力を！
タケダの…綜合ビタミン剤
武田薬品
パンビタン
錠（30錠・100錠）ほかに 液・末・M（ミネラル入）



川柳塔

大阪市　中島生々庵

蚊のかんだ跡まで探し嫉いてくれ
この無理を聖天さまももてあまし
世をすねて居るのにのんき者にされ
押し売りにもうそのとんち見すかされ
頑固さをとんちでほごす手を覚え

豊中市　戸田古方

義理のある葬式一つ見落して
先生のチームぐらいには勝てゝ
ふくみのない人をやたらに非難して
ヴェレー帽女とかえことして見たり

大阪市　市場没食子

スピッツを抱いて夫人に徒歩の用
元日も父には雞の小屋掃除
三ケ日アパートは鍵かけたまゝ
手を出せば母のない子が抱かれに来
雰囲気が好きと呑めないのが酌し
二、三日禁酒をしたをふれ歩き
母の咳子の咳暮も後三日
上役に逆う気なり昼の酒
元日の風になびけり旗と幕

ホノルル市　内藤草一郎

青雲を養老院で笑い合い
金持ちに似たは肥って禿げただけ
後腐れ避けて浮気を金でする
愛情の表現痛いつねりよう
神聖な恋を情婦と人の口

東京都　宮田不二

よく見ればおや税務署がストに入り
制服の巡査も好きなスポーツ紙
血圧は高し葬儀社よく目立ち

東京都　前山北海

騒音に慣れて真実聞けぬ耳
ベストセラー頭に詰めてよく喋り
秘密持ち女の歴史始められ
可愛いゝの一言待って居た女

鳥取市　大西八歩

初雪を都会は消すに陽を待たず
初雪に無口も少し口をきゝ
初雪がいっそ旅人らしくする
持てるだけ提げて乗り込む十二月

池田市　黒川紫香

何やかや云い〳〵子供また出来た
階段で馴染と逢うた声になり
家計簿を投げ出し夫婦蜜柑むき
まかしとけ云うのが一番酔うている
内職へ何のかんのと話しに来

大阪市　丸尾潮花

妻ふっとお園のようなことを云う
マヽさんは別居しているめしを焚き
イヤリング名取りの耳で灯をはじき
無理矢理に呑ませあんたもいけますな

大阪市　北川春巣

ロシヤ語で食える日本になって来る
ヌードショー種痘の跡も見て帰り
独身の部屋はやたらに釘を打ち
ビル街の靴修繕も日曜日
お葬式ばかりに名刺減って行き

奈良県　尾崎方正

五寸程の席へ担ぎ屋割って入り
凍てた路へ疲れた靴がよく響き

下関市　桜川不水

イヤリングいや〳〵と云う震え様
痛快に飲んで嫌悪の朝となり
アドバルン乙女心が浮いた様
敗戦はエロチシズムに栄えてゆく

大阪市　武部香林

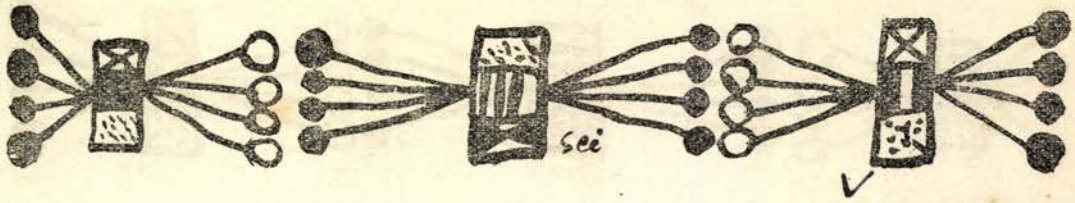
死にそうなのは病院へ紹介し
七癖をかくしわが娘の式が済み
奥様の長湯へ子等は風邪を引き

大阪市　福田妄夢

めくら判印肉すねてついてやり
どの雨も池へは円となって落ち
けものけものダブルベッドに朝が来た

出雲市　尾緑之助

窮すれば通ず意外な金を借り



水仙のゆがんで伸びた先に花
十二月ちろりの艶をいとおしみ
大阪市　水谷竹荘

妻のまねいつとはなしに嫁もする
どこへ行くにも老妻ついて来る
院長も同じ人間風邪も引き
忘年会何度するのと叱られる
好きな事しときなはれと妻ひらけ
兵庫県　小沢史葉

へそくったプラスアルファー見つけられ
大臣にやっとなれたる笑い様
西川恵風氏の計に
盲判とう〳〵おさず名課長
兵庫県　小西無鬼

無口者あんな司会をやってのけ
冬オーバ去年の皺を着て出かけ
親が唄えば子もエッサッサで囃し
大阪市　吉田斜水

生意気な車掌の名札見て降りる
抜く位の白髪なら君まだましさ
串カツで下地をつけてストリップ
尼崎市　小林文月

弔客がかわり涙も亦かわり
事務的に隠亡とびらをガタと閉め
大阪市　冨岡淡舟

松の内妻の疲れが目立つのみ
娘の彼氏が飲むから酒を買っておく
他所行きの下駄長男が割って来た
丹前で居ると閑人らしく見え
毎朝を誰に見せたい鏡なる
奈良県　飯降白香

駅の灯が霧の流れで旅愁めき
老嬢はシンネコの意を辞書でひき
奈良県　西辻竹青

出家して見よかと思う日もありき
奥様に知れたらどうと詰められる
山口市　長野井蛙

仕事せぬ課長の指にパイのたこ
金が出来内助の功を忘れかけ
特価品ですよと歳暮見くびられ
大阪市　麻生梨里

ロマンスグレー役所勤めも飽いた顔
きれいな手ですと手だけを褒めてくれ
布施市　森下愛論

遅かった親の情の家出の娘
酒ぐせも笑ってすます三ケ日
女房叱るに課長の真似をする
税務署は散髪前に行っておき
岡山県　直原七面山

六三制が家風にそわぬ娘に育て
自惚れの強さへ仲人寄り付かず
名の洩れている淋しさをかみしめる
ゆきそびれ貰いそびれと結婚し
好きな妓に出逢うて釣のプラン捨て
ボーナスは手応えもなく消えて行き
女房に養われてる照れ臭さ
休養さなどゝ淋しく肺の人
鳥取市　河村日満

再びは来ぬ青春へ気が小し
面目も御座なく土産落して来
神も仏もあるかと戦後から変り
公僕はきちんと休む十二月
顔見世のスター法事もして帰り
大阪市　西いわを

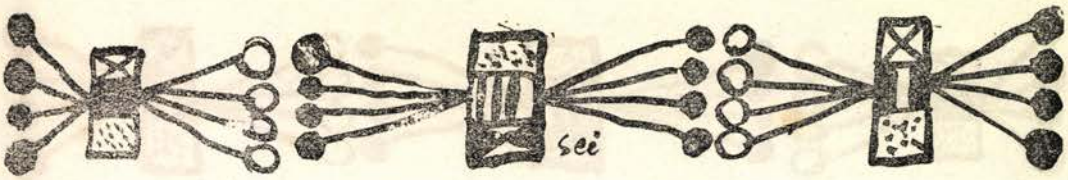
ある日ふとマネキンを羨しと思い
女子大は鞄の色と服の色
岡山市　服部十九平

端切れ選る妻を喫煙室で待ち
秘密会若い部長がお茶を淹れ
三畳の炬燵へ膝を曲げて寝る
大分県　桑原養痴園

失恋のひねもす云わぬ娘と父と
借りて来た電話でやっと会社出来
レントゲン何でもない子を病気にし
大阪市　足立春雄

腹立ちが自由に出せる地位となり
苦労しに生れた事の判る年
忘年会見馴れた顔が一つ減り
兵庫県　若林草右

釘一つうつに国宝許可がいり
失業の眼に贅沢な坐り込み



スタンドは胯に鞄を呑みつゞけ
冬オーバ着て老を知る歩きよう
あとさきへお辞儀〳〵の借電話
高知県　大西迷窓

胸の線見てる男へほくそ笑み
奥さんがないよなネクタイして出かけ
借金は済んだ女房は酌いでくれ
大阪市　安岡珊枝郎

音痴だが社長の咳はすぐ分る
筋金が這入って居ても年は年
呑む事の計画計りして暮し
咳ばらいしたが遂々振り向かず
大阪市　牟田一哲

宇治川の先陣真似て失敗し
どたん場にシラノのとんち見破られ
一応は頓智にたより借りまくり
大阪市　河村瑞川

賢夫人頓智などにはだまされず
広島県　山田季賛

ブレーキのきかぬ同僚について行き
新聞が女房の化粧変えさせる
大阪市　山本葉光

母があり血気の勇を耐え忍ぶ
宣伝部ミーハー族を軽視せず
倉敷市　木村千容

迷信も真剣なれば笑われず
電話でもせねば婚約気がすまず

嫁ぐ日の少なくなりし鏡かけ
婚約は男好みの柄に決め
鏡台を据えて嫁御の座がきまり
倉敷市　田垣方大

焼鳥屋俺の相場をもう見抜き
幸福よなどゝ女はまたせびり
旅淋し藁ぶき屋根に灯がともり
電灯の笠まで割ってボディビル
話だけなら聞きますと十二月
人形をしまいなさいと十二月
石川県　那谷光郎

屋台店客のまにまに湯気を上げ
眼で叱る事にも馴れて老妓で居
日帰りの慰安に惜しい温泉があふれ
親の目に自信ある娘のまだ嫁かず
堺市　八木摩天郎

えらいさんの車代なる市民税
借りる身にぞろ〳〵ぞろと仲介者
倉敷市　椙原一善

風邪くらいで寝るにもったいない天気
課長さんが来た〳〵事務の話をし
雲までもいそがしそうな十二月
貢いでるから本妻へはゞからず
岡山県　田村藤波

全快の当座は慾のない話
深入りをして借りて来る電車賃
御希望とあって洋服に娘を仕立て

雲行きが変ってつっかい棒をやめ
岡山県　岡田夜潮

言葉だけかわせど氷炭相容れず
国からの小包餅とにらんだり
ぞんざいな妻の言葉も師走なり
思惑が外れて納屋へ居を構え
岡山県　臼井三林坊

末っ子の赤い枕のそばで寝る
銀行の担保の家の白椿
岡山県　本田恵二朗

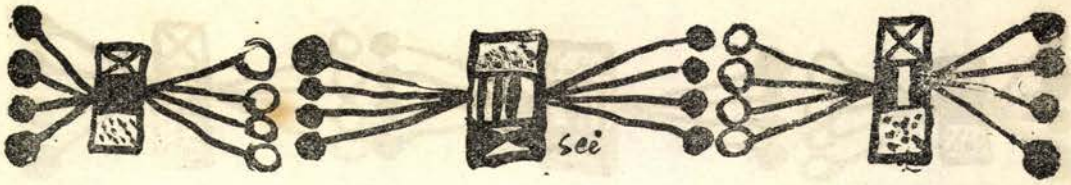
ノイローゼタクシー選ぶに暇がいり
写真では淑女でザんすと云った顔
綴り方あの子にあった心がけ
大阪市　真鍋一瓢

嫁き戻りだとは知らんで云い過ぎた
惚れさせる術もありまっせとは金か
久々で逢えば不景気だけ話し
さもあらん見切りをつけたのは女
京都市　松川杜的

課長さんの随筆だから一冊(ひさつ)買い
停年をきっぱり上役のいゝ度胸
大阪市　永田六龍子

儲からぬ儲からぬと建てたり囲うたり
吠えられる迄に人相堕ちて居り
鳥取市　森本法泉子

汽車に乗る時計は口に出して読み
十二月また投函を忘れてい



療養所冬の景色の中にたち
倉敷市　松村万古

座布団へお返し申す金を載せ
内職の身に秋の夜も短か過ぎ
初雪の量が子供に物足らず
生字引子飼の恩を忘れかね
支那そば屋自分の笛へ寒気がし
パチンコの秘訣飲み屋は聞き倦いて
明日は明日そんな気持の梯子酒
下駄の音寒さ運んで消えて行き
倉敷市　藤井春日

おふざけでないよと妓に居直られ
なべ焼をとりましようねと雪模様
本宅へ二号師匠として召され
二十貫神経質とは恐れ入り
浴槽で末っ子ショーの真似などし
居つゞけの紙屋治兵衛を地でゆく氣
啄木を晶子を語る妓で売れず
十二月原子爆弾裂けて欲し
大阪市　平尾太希志

暢気になって一年目に棺を出し
もう一つ咳してごらんと野暮な医者
大阪市　海野比呂史

年頃は父の暢気が気に入らず
暢気ではないさ患者が来ないだけ
岡山県　津田麦太楼

晩酌に苦り切るのが内の人
中風病み他人に見せとうないおまる
菊のバッヂ大小があり市議県議
いぢらしい亭主で御座る十二月
茶の花に似て老らくのうら佗し
三代目杉伐って売り伐つて売り
随筆に誤診の事を書く国手
二号から戻り商魂また沸り
米子市　小西雄々

年頃の哀しい時は鏡を見
葬式のせわしさに似る大晦日
ロマンスを聞かれ嬉しく否定する
岡山県　浜野奇童

無理にとは云わぬとボスが来てすごみ
初雪へとう〳〵先生引き出され
大阪市　橋本峰春

雑草のねばりをもって生きて行き
洗濯機買ってやりたい女房の手
吹田市　橋本幸男

ヌード喫茶キッス売りますとは書けず
堺市　高崎雄声

殉職で一躍模範社員なり
貨車作業ドンと当ったいたましさ
念入れて見たがやっぱりスカのくじ
大阪市　吾郷玲人

もう一本ほしいが然し十二月
乙女三人タダおかしくて〳〵
白足袋の乱舞となった披露宴
岡山県　岡田青果

朝帰り家内一同みな無口
妻君は虚栄亭主は胸を病み
靴下を穿かない方が継子です
貯める慾一生父につきまとい
西宮市　若本多久志

銀行は慇懃にして貸しもせず
女さえ伴れてりや二号かと訊かれ
合の手も待たぬ小唄を眼で嗤い
重役のネームバリューに女惚れ
島根県　藤井明朗

夢で見た猿の世界もボスが居た
よい子等のエサにお猿も松の内
岡山県　永松東岸子

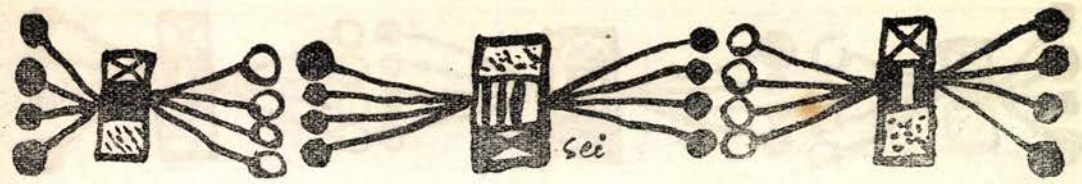
終電の客が増えたも十二月
ライバルが受話器のそばにいるらしく
養子にはしやれが通じぬまゝ別れ
二等車の空気をみだすウイスキー
駅弁に各駅停車あとにされ
倉敷市　野田素身郎

まるくおさまるならば無実の罪きる気
人の気も知らずさっさと汽車に乗り
面会の美人は借金取りだった
ボーナスの出た日家とは違う道
大阪市　神谷凡九郎

ボーナスが出たぞと足も知った音
天性の陽気が恋を育てない
大阪市　山川阿茶

円満は暢気な父さん的であり
失敗じって出来た子供に養われ
大阪市　清水望峰

もち米は買うなと故郷から便り



さて髭が出来たが席がまだ空かず
大阪市　木村十悟

火鉢はさんで不渡りをじっと見る
電車待つ寒さを軒にへばりつき
ヒマな事ですなとふところ手の二人
ボーナスを貰うたら御出でやすやと妓
大阪市　不二田一三夫

モーニング紋がないから借り易し
サーカスへゆけばよかった出前持
万引が寄りつかぬほど店さびれ
儲けてるらしい大工が出入りする
大阪市　岩崎一伸

子のとんち一家の人気ひっさらい
兵庫県　酒井ひか平

南紀の旅

那智の滝一と雨ふらな淋しかろ
矢張り一番はいいねと那智山
初日の出もったいないが湯で拝み
特売へわっと泣き出す背中の子
一合で差しつ差されつ共白髪
根気よき他人の奥さんとも知らず
禿げましたなあと床屋もなでて呉れ
損な人ねとにぎりずし妻が喰べ
倉敷市　長尾越鳥

逢うてる間にバス一稼ぎして帰り
其の実は生活に困る雪をほめ
芸者ワルツにボーナス半分とんじまい
倉敷市　佐藤千代春

眼帯を少しまくって見る晴着
東京都　石居高志

共学は夫婦気どりのアルバイト
終電車帰った筈の人に逢い
大阪府　深見雅童

後添は粋筋と云う社長邸
雰囲気で買わされて居る特売場
宇部市　津秋六花

女から仕掛けた恋を意地で逃げ
神戸市　野村初市

どうしても歌手になります声を持ち
三面鏡買いもせぬのに明けて見て
テレビへ渡辺はま子もふけたわね
かに半匹へやっぱり一本つけましょう
大阪市　金井文秋

競輪と別れが出来ず老舗売る
我まゝな子が玩具屋に有難し
蔭の声気にすりや幹事勤まらず
岡山県　戸田喜楽

一線を越えて無口な娘に変り
盃へ借金取りの顔が浮き
岡山県　池田古心

浅太郎の型で田圃に子を背負い
銀の輪をはめて一年床に伏し
税務署が縁切れをした煙り立て
岡山県　坂手有子

新妻の雑煮家風のまゝの味
正月は子と逢う丈けの指を折り
二日酔バンプの夢がまだ残り
愛人を譲る映画に泣いて来た
四十の見合へ子供もうなつき

先輩を気取れば寄附を申し込み
バカネーで女の抗議けりとなり
自家用車型の古いが玉にきず
赤旗の淋しからずや年の暮

同舟近詠

松山市　前田伍健

商魂はジングルベルで金集め
歳なんか忘れて野球拳教え
デパートでつくだ煮買った綴り方
月給日何も云うなと寝てしまい
W＋M女湯へはいり
須坂市　高峯柳児

妾宅も暮の算盤はじいて居
新生活運動商魂負けて居ず
禿げるよりましの白髪を羨まれ
今治市　長野文庫

停年が近く投資の相談書
留学も可能との由講義録
六法は口約束を取り合わず
真か偽か角帽で売る暗記術
自慢にはならぬ本らしカバー掛け
視察談パンフレットの通りなり
料理本嗜好の点は考慮せず
門司市　菊川泰平楽

中国を想う

金泥の迎春もよし支那恋し
三猿は昔言う聴く見るの春

横丁人間 (34)

長壽談義

東野大八

去年は物心両面に二つの明るい収獲があった。その一つはわが国未曾有の大豊作であったということ、いま一つは日本人の寿命が十四年も延び長生きできるということ、この二つである。この二つだけを頭において他は一切考えずに明るい顔をしておくこと、さすればまた眼先の寿命もまた延びようというものである。

話によると十四年も寿命が延びたのは、この九年間のことだとある。直接の原因としては医薬の進歩だとかなんとかいろいろといわれているが、私は人間が増えすぎて相対的に死亡する人間が減少を来したものと判断している。考えてもご覧なさい、この九年間という日本の現実を……敗戦、そして飢餓、さらに当面する今日の日本の実情。原水爆という問題一つを考えた丈でも生命が縮まるし、松川や砂川事件の一つ一つにさえ血圧が上る、いわんや基地だらけの日本とそれに対処する政治のくだらなさを思えば、神経衰弱の要素となる資格充分で、これで一日でも寿命がのびたらみつけものである。もっともあまり今の日本がバカバカしくて、心頭一転けろりと一切を忘れてアハ、、と笑えば話は別だが、いや察するにこうした人間が世に多すぎるが故に、人間エトウの一回り以上も長生きできるという逆説も成立つ。この分でいくと、現在の政治のくだらなさが、当分続けば続くだけ十四年の寿命が、十八年となり二十年となることも可能であることがいえそうだ。

まあ、こんな話をしてもねっから面白くもないので、漫然と長寿の話でもしよう。長寿といえばわれわれは貝原益軒を思い出す。彼は長生したければ、気を和らげ平らぐべしといっている。これを今日的意味に解釈すると「世論にかゝわらず政治にこだわらずたゞたゞ一途に己れの本分に徹すべし」という兵隊に賜りたる勅諭の一節みたいなことになる。いうやよし更に彼は、房事を行うに礼装をもってすべしといっている。女と寝るのに紋付羽織でという言葉だが、これは王女の寝所に赴く意ではなく生活を厳粛冷静にすべし、さすればバカげた不養生はできないといったことを訓えたものらしい。彼はこういって人間短命の源は色慾にあり、としたらしいが、私はこの説を信じる気にはなれない。長生する男は絶倫である例は、政界一つをみたって枚挙にいとまがない。精力を抑圧した方が身の為によいのか、それとも適度に発動させた方が生理的によいのか、その点神様でない限り判らない。たゞ中国の延寿経などをみると「へいこの術」という楽しんで洩さずの中国誌延命長寿の極意のあることを思い起すに止る。もっともウイスキーのオールド・パールのおぢさんは、百十二才で少女にいたずらして刑務所に入り出所して三人の奥さんを迎えたが、長寿のおかげで英皇室によばれ、百五十二歳で死んだ。その死因は、英皇室で御馳走になりすぎたというのが直接的で何も房事の故ではなかったらしい。こうした実例の幾つかを見聞するにつけ、私は老後の性慾をあまり不用、敬遠すると中心点の萎縮を来して老衰を速めるのではないか、という懸念すら覚える。だからといって、生地の傷んだ化物をあまりいじろとすべてを台なしにする怖れなきにしも非ずだが……。

こゝらで天然? の長寿に対する私の持論だが、親が長寿なればその子も必ず長生する。つまり両親の老衰死の平均年齢をわが寿命とし、それを目標に専一自愛する。その甲斐あって両親の平均年齢を上回るときこそ「孝」であると——。芝居などで「親に先立つ不孝者」なんてよくいう台詞の根拠はどうもこの点を指したのではあるまいか。

要するに、人間が自己の樹てた長生の目標にゴールインすることは、人生のチャンピンだということができる。六十の線に立てば七十へ、七十に及べば八十、九十ラインへ。しかし注文通りその栄光の紙テープを切ることは難しい。お医者様なら御承知のドイツ語の教科書マクロビオティークの著者フーフェラントは長生学の権威だが彼はわずか六十八歳で死んだ。理論と実際の厳粛なる差異を彼は証明したわけで、百二十余年も前の人だが、彼の死に当時世界中の人々は、人間長寿の限界は六十八年であるかと嘆いたそうである。貝原益軒も同様で彼は八十五で死んだとき、時の世間はこの人でさえ八十五年、非力なわが身はさしずめ五十年位だろうと若い人のほとんどが考えたという。この斯界の権威者に対しうな丼ばかり食っていた大倉喜八郎は九十二歳で死に、隻脚短命説を持出されていた大隈重信は八十五で永眠した。

「わしは長生することを考えないでいることを長生の信条としとるんだよ」といっている現岐阜県知事武藤嘉門老は、今年八十七歳で三年後の知事四選への立候補をかくしゃくとして自負しているという具合で、案外これが長寿のコツかもしれぬ。寿命は天の命数である。昔からこの命数には、歌舞伎座の客席みたいに等級があるといわれている。生れた限り息災で生き命数のあらん限り健かに完うする、というのが人間の本願だが、老の身の不安にかられるまゝ秦の始皇みたいに一服の長寿の仙薬を求めて自らの生命を縮める愚はさけられた方がよさそうだ。とにかく長寿の道は、老いれば過去の楽しいことだけを、ほろよい酒の気分そのまゝで思い起し、現世もまたうれしいことばかりをみつめて眼を細め、淡如超然と川柳していくことにありそうだ。

(三一、一、一)

川柳雑誌社特製
投句用 柳箋
一冊(五十枚綴)三〇円
送料八円

新川柳鑑賞

麻生路郎

〔二二六〕
迷い子札妻は俺にもつけたがり
（生々庵）

今そこにいたかと思うともういない。出たらいつ帰って来るのか判らない。何処にいるとも云わないで二日も三日も泊って来る。こんな夫はザラにある。迷い子の札をつけたがるのもムリはない。妻の心境をズバリと詠んだ句である。

〔二二七〕
直された癖で謡っている謡
（梅志）

なんでも聴く人が聴いたら判るし、観る人が観たら判るものである。そうした真理をこの句から知ることが出来よう。先生はよい先生を選ぶことである。

〔二二八〕
手錠かけてからあゝ君かいな君かいな
（闘骨）

新派悲劇の一場面を描写したような句である。

法は厳粛である。手錠をかけた以上見逃がしてやるわけにはいかない。少しでも刑の軽いことを祈ってやるより術はないのである。この句はロマンチックな句であると云えば云えないこともないが「あゝ君かいな君かいな」と畳み句にして友情を感じさせる手法をとったのがいのちである。

〔二二九〕
青草に寢転んで極楽だ極楽だ
（粗影）

青草に寝転んで春の大気を心ゆくまで呼吸しているさまを実に率直に大胆に詠んでいるではないか。

〔二三〇〕
宮詣り本人様は欠伸をし
（香林）

宮詣りというのは男の子なら生れて三十一日目、女の子なら三十三日目に、その産土（うぶすな）の神に参詣するのである。からだよりも大きなたけの長い美衣を纏わせられている。それが親としての誇りのようでもある。しかし、この句では赤ン坊は何んにも知らないで欠伸をしているというのである。ユーモラスな写生句として一つの発見である。

〔二三一〕
軒下を借りる靴屋で世を終り
（七面山）

何んとかして、何んとかしてと思っているうちに月日は容赦なく流れる。とう〳〵軒下の靴屋で世を終ったというのである。それが人生というものであろう。

〔二三二〕
かき眉毛みみずくという顔になり
（栞）

かき眉毛というものは下手にやるとまことに滑稽なものである。それがあこがれの映画女優のかき眉毛などを真似たりすると一層滑稽なものである。「みみずくという顔」になったとは思わず、本人は案外平気でいらっしゃる。女ってものはとツイいらぬことの一つも云いたくなる。

〔二三三〕
息子卒業菊の翁にまだ成れず
（静観堂）

息子は大学を卒業したが、菊を作って余生を楽しむと云う訳にはいかない。いつまでも現役で働らき続けなければならないという近ごろの老人の心境を詠んだ句である。

〔二三四〕
螢光燈のせいにしておく唇の色
（梨花）

「どっか悪るいの？」
「いゝえ、別に」
「でも唇の色が変だわ」
「螢光燈のせいですよ」
と、すべてを打ち明けようとはしなかったのである。女性心理にメスをあてた句。

〔二三五〕
断ると言って表彰待って居り
（養痴園）

文化勲章だ何ンとか勲章だと、近ごろは勲章ばやりである。金がやれないから、勲章でごまかしているのだと聞かされたら味もそっけもない話だが、それでも勲章一つで老人の顔の皺がのびることを思うと、ありがたいものに違いなかろう。「イヤ、今更勲章でもないよ、やると云ったら、断わるよ」と云うが、その実、「何んとか云って来そうなものだ。俺より後輩の誰れそれクンにさえ云って来てるんだからなァ」と心中おだやかでないのである。

〔二三六〕
繼あてゝ天地に愧じぬ作業服
（水堂）

汚なく働いて綺麗に食えという言葉がある。油じみた作業服で今日を生き抜く。あちこちに継ぎがあたっていようが誰に遠慮が要るであろう。「天地に愧じぬ」はいささか大げさな云い方であるが、誇張法の句として面白い表現である。

〔二三七〕
麻雀とあたしとどっちなのあんた
（方丈）

麻雀は細君にとって苦手である。負けたと云っては癇癪玉を破裂させるし、出掛けたらいつ帰って来るか判らない

し、たま〳〵帰ると質ぐさを持って行くし、会社は休み通しだし、家庭は火の車である。「麻雀とあたしとどっちなの」と悲鳴をあげざるを得ないのである。話し言葉で実に巧みに雰囲気を出した句である。

〔二三八〕

惡しざまに話せば妻も敵にして　（日　満）

「あいつは実に怪しからん。課長にゴマばかりすりやァがッて」

「ホントにいけすかん人ですわ、この間も斯う〳〵ですの」

というところか。妻も案外本気になっている。

〔二三九〕

たまに見た映画はキツスばかりして　（湖　山）

映画を見たからと云って別に腹の足しになるわけでもないが、永い間見ないので、フト見る気になった。ところがキッスばかりする映画だったのでウンザリしたというのである。たしかにそんなことを経験する人が多かろうと思う。軽い穿ちの句である。

〔二四〇〕

恩師機嫌わしも家内が苦手じやて　（伊知呂）

恩師のために一席を設ける。いける口とて、とても〳〵も御きげんである。「お前は梯子か、そうか、家内がうるさがるって、そうかそうか、ワシも家内は苦手じやて……」男にはこんなうれしい世界があることを世の女房どもは知っておくべきであろう。情景なり、人物なりが話し言葉によって躍動しているではないか。

〔二四一〕

すき燒の健啖体制整える　（夜　潮）

「体制整える」はいかにも大げさな云い方であるが、そこが誇張法の面白味である。日常の茶飯事でも表現技巧によって、この句のように句を生かすことが出来るものである。

〔二四二〕

猪口をもつて見たらやつぱり月はよし　（鳩　花）

飲めん奴は談せんよと云いもし、聞かされもするが、全く酒はいいものである。自然だってそうだ。酒がなかったら一時間と見てられるものじやない。変哲のない月にしても猪口を手にすりや、一段と美しく見えるものだと感じたのである。

〔二四三〕

嫌いかと露骨な問も酒の席　（万　古）

「僕は君が好きなんだが、君は嫌いか」

と聞く。

「いいえ、嫌いじやないわ」

「嫌いじやないが、好きでもないというのだろう」

酒席というものはこんな露骨な問をしても、ちっともおかしくないのである。

〔二四四〕

終電車さつきの媚がツンと居る　（修　三）

キャバレーでの痴態も彼女の営業用の媚だったことをハツキリ認識させられた訳である。「さっきの媚」とは巧い表現である。

社の黒板

▼川柳雑誌社松江支部の復興――一月から松江支部が勝谷山川児氏等の手で復興されることになった、支部所在地　松江市本次町なにわ旅館内、支部長　勝谷山川児▼川柳雑誌社岡山支部は一月八日に左記へ移した岡山市上伊福七一番地　支部長　土井雷山▼川柳雑誌社赤坂支部（岡山県）は都合により十二月末日限廃止することにしたので支部員は便宜上近接の川雑支部（備前支部又は岡山支部）に合流されたい。

粗影の句

安川久留美

久し振りに上林粗影君の句を観た。

柳誌「百万石」の末期作家の一人として、自然情景をとり入れ、川雑中の異色作家には、違いないが視野の狭い、うらみはともかくも、枯淡の味は見逃せないだろう。茲に数句を俎上にして観る。

台風一過猫やんわりと戻つて来

いゝ句です、猫のずるい眼が見えるようです。

不覚にも隣へ落ちた柿のぞく

人間的さもしい気持だが、みな凡人のあり得る図です。佳句

茲きざむ音も我家の伴奏だ

曾て私の旧作「俎板に葱をきざめば冬の音」という技巧よりも下五。新味を頂戴する。

眼鏡踏むなと祖父の早い床

早い床が一寸月並だ、いゝ表現はない？「めざめたる」といって試た。

仙人掌よなんぼ咲いても獨身者

やもめ暮しも久し軒の唐辛子

作者の実感に同情する。いゝ句です。

短評あしからず、孤高の作者よ、柳壇の異彩たる日を切に祈る。

麻生葭乃著・米田三男之介装幀
葭乃句集
福壽草
定価二百五十円
送料　三十円
菊半型・函入
本書は川柳の母・麻生葭乃女史の異色ある作品の金字塔です。各方面から御好評をいただいて居ります。
大阪市住吉区万代西五の二五
発行所　川柳雑誌社
振替口座大阪七五〇五〇番　電話住吉（67）六〇八一

川柳第二教室

作句指導

戸田古方

ハハハハからアハハハハ

研究題「笑える句」

ほっとけば自然にほゝ笑むこともありましょうが、無理に笑ってごらんなさいとなると、ひよこゆがんだ笑いになってもしかたがありません。笑える句でほんとの笑が出てこないのも不得止ともいえるでしょう。研究題としてこのような種類はまだありそうに思いますが、自然にたくまずして出来た技巧を拾い出すとして次の出題からレギュラーなものにもどってみようかと思っております。

さて今回集ったものですが狂句とまでは行かずとも、それに近いくすぐり笑いが多いようでした。

気がつけば手に持っていた探し物　牧人

足の指中三本の名を問われ　微酔

気短かの取柄は忘れっぽいところ　恵二朗

の程度が上の部類でした。しかし凡作以上ではありません。

風采のあがらぬ方に金があり　直路

云い訳へつんぼになってだまってる　登

穿ちから来るおかし味は出ていますが、やはり「これぐらいではいかゞです」と押しつけられた感じです。巧みな穿ちは充分に笑われ、そして詩もあり、川柳の醍醐味ともいえるのですが、

笑い顔元へもどるか案じられ　文平

そうしたなかで笑える度合はとにかく、みつけどころとしてはすぐれた一句であったと思われます。

それにしてもこうした一連の句のなかで

タチツテト入歯はづせばダヂヅデド　恵二朗

はたしかに笑える句で、しかも秀句といえましょう、これは今度の路郎先生著の「川柳とは何か」にものっていまして、適評が加えられておりました。この句に関連して

子沢山みんな笑ってハヒフヘホ　文平

文平さんは笑いの音声を生につかった、擬音あるいは擬声といわれる句を四十ほどならべてこられ、よい研究と分析がこゝろみられておりました。この句はその序論的地位にあるのです。

といゝますのは「ハ」「ヒ」「フ」「ヘ」「ホ」はたしかに人が笑う時に発する音の音底でもあるのです。

私もこういうことに興味をもっておりますので、この機会にその考えの一端を披露して、批判をあおぎたいと思いたちました。

ハヒフヘホをローマ字でかきますと Ha, Hi, Fu, He, Ho, で語尾に a, i, u, e, o, アイウエオがつきます。そしてそのアイウエオには次のような意味をもっていゝのです。

「ア」はアク、アクビ、で退窟、超然、「イ」はイジワル、イジメルで消極、悪意、「ウ」はウルサイ、ウメク、ウットシイで苦痛、「エ」は絵のエ、笑のエ、エガオなど愉快、享楽、「オ」はオドロキ、オカシ、で驚きと発見、そしてオトナというと成長の意味にもなります。

柳友半仙氏を憶う

浜田久米雄

備前支部の岩本半仙氏が忽然と他界された。十二月九日に発病されて、十二日の午後六時に亡くなったのである。ちようど山陽新聞社の読者川柳大会が十一日に開催されるので、十二月六日七時頃、ぼくが夕飯をたべていると訪問を受けた。大会への投句の添削と柳談であった。二時間ほど話をして大会への出席を約し、支部の忘年大会が二十四日に開かれるのを楽しんで帰宅された。大会では案外よく抜けて、確か六句ほどだったと思う。十二日の晩、正州君が半仙氏の死を知らせてくれた時ふと思い出して、大会へ出さなかった氏の句箋が四五枚残っていたのを出して見ると「目をつむり」「老い果てゝ」「目に入れて痛うない子に泣かされる」の字句が二人の目にはっきりと迫って来たのである。

数日の後に迫る死を意識して作句したのではなかろうと思うがこの奇蹟にぼう然としたのであった。仕事が建築業であったため年中忙しかった氏の楽しみは川柳と晩酌とにあった。柳歴は七年ほどで、発表した句は少なかったけれども晩年になるに従って句に重味とすごさとが加わって来た。半仙流の個性を段々表して来たのである。支部では時々句会の後でアルコールが出る。アルコールが出ると話がはずむ、話がはずむ中でも特に半仙氏の柳談、句評は特に目ざましくいかにもたのしそうであった。午前二時三時となっても帰りそうもないので、ぼくの方から切上げるように催促をしたこともたび〳〵であった。葬式の日、後に掲げる追悼句を会葬者、親族の前で正州君が読み上げたのであるが、短冊に書いてある句がみな読めるのに胸につかえて声にならない。すゝり泣きの声にかこまれて正州君の声はとぎれ〳〵につづいた。読める字が読めなかったのは生れてはじめてであったとは正州君の述懐であった。ぼくはかってこの経験があり読む役は固辞したのである。

故岩本半仙氏遺句

寺詣りする気になった花さかり

御隠居の起す気らしい朝の咳

落ち目とはこうも当るか暮の風

夏やせの背気の毒なほどにやせ

ひようたんを床のだるまがにらんでい

子の寝顔たゝかれもせず蚊を去なし

そしてハヒフヘホをそのまゝ笑いにもってゆきますとハハハ、ヒヒヒ、フフフ、ヘヘヘ、ホホホ、はいずれも皮肉な、むしろ不健康なともみえます。

ハヒフヘホそのまゝにせず、頭にアイウエオをつけた方は日常自然の笑いになりそうです。アハハハハは口先でなく腹の底からの天心爛漫ともなります。ヒヒヒヒヒ、フフフフフよりイヒヒヒヒ、ウフフフフ、どちらも魔女の笑でしょうがイ、ウのついた方がその悪意を緩和しているようでもあります。エヘヘヘヘにしてもヘヘヘヘヘより、又オホホホホはホホホホホより笑いやすい笑いになっているように感じます。

又同音を三つハハハよりハハハハハと五音重ねた方がやわらかにきますし、ソク音でハッハッハッとつまった方が同じような効果をあらわしているようです。

文平さんはそのデマもハッハッハッハと取り消さず

ハッハッハも一度一緒にアッハッハ

ハッハッハ何も残らぬ馬鹿話皮肉とは知ってゝホホホとすましとり

ヘッヘヘヘ腹をすっかり見すかされ

ハヒフヘホ何でも入っています。文平さんの句を見ているうちに私の独断の解釈をきいてもらいたくなってしまいました。

第二句にハッハッハとアッハッハが入っていますが、小馬鹿にしたハッハッハがいつかアッハッハと諦めというか悟りというか、そこに心境の進化が見られるのも川柳そのものゝ進化と一致しているようでもありました。

川柳の笑はさまざまです。脇の下をくすぐるような無理をしいる笑から、頭で割切らそうとする理智の笑、大部分の穿ちがこれですが、それから義憤をぶちまけろ腹の底からの怒りが諷刺となり皮肉となります。人情の琴線にふれて胸を痛ましめる涙の笑い、そしてやがて悟に近い軽味の笑、やがて聖なる境地に進んでゆきます。

も一度文平さんの句にもどって

笑い声カラカラカラと路地を抜け

は乾いた笑いといゝますかカラカラから石畳を歩く高下駄の音がきこえて来ます。

カ行は冷厳、サ行は爽涼、タ行は量感、ナ行は粘着性、ハ行は皮肉、マ行は結合、ラ行はころころころがって行く感じ、全てが笑いにはならないかもしれませんが、音の持つ意味の追及は私の永遠の課題でもあるのです。

素朴な笑の中には性から来るものもあります。

実質を素見されてる子沢山　直路

睦言へ子はパッチリとおめゝあけ　直路

交尾してゐる蠅へフト腹を立て　亀庵

充分ブレーキはかゝっていますが句の方のアブな絵ですね。

独断の末は話が下ってきそうです。脱線し切らないうちにやめることにいたしましょう。

研究題　「蕾」

〆切　二月十五日

発表　四月号予定

投句先　豊中市本町三丁目二〇一　戸田古方宛

かみそりを置いて親方一服し　成人を灯として毛糸編み

古屋敷つるべの柱だけ残り

備前支部同人の追悼吟

慟哭の袖絞らせる供に立ち　娯句楽

目に浮ぶ蓮のうてなに開く句座　東岸子

柳友の訃を聞く今朝の霜きびし　柳風子

柳魂は朽ちず安楽浄土の灯　久米雄

子を思う心絶筆とはなりぬ　拙望

面影は句評にはずむ君なりし　与詩雄

思い出が涙になった君と僕　浄美

思い出を語る半仙今は亡し　幸仙

玄能を振るまぼろしとなりし君　呑竜

BK放送川柳

課題「丹前」　麻生路郎選

佳作

大阪市　本多省三

選暦のまだ丹前は着て居れず　下関市　桜川不水

丹前になって横綱子をあやし　神戸市　大西十九一

丹前で坐れた寄席を恋しがり　堺市　大原由夫

丹前を着て国会も休みなり　石川県　惣川笑路

丹前を出してやるから飲めと云う　岡山県　宗高矢寸志

押売へ丹前にべもない返事　金沢市　松永恒青

丹前のまゝ飛んで来た宿直医　神戸市　野村初甫

丹前の紅一点は呑まされる　大阪市　山本葉光

丹前の肩抱き合って撮る少女　神戸市　福智一夫

日帰りの宿で丹前着て写し　大阪市　石田沐天

丹前になれば猥らな時の人　大阪市　山川阿茶

妾宅で丹前のまゝ人に逢い　岡山県　臼井三林坊

丹前の署長がうまい安来節　愛媛県　村上崇雄

先着の順に丹前身に合わせ　岐阜県　伊藤とみお

丹前のたもとピンポン台を撫で

入選第三席

大阪市　正本水客

丹前にさっさと男だけ着替え

入選第二席

兵庫県　酒井ひか平

ネクタイも取らず下役丹前着

入選第一席

兵庫県　永尾英断

丹前を妻ぎこちのう着て坐り

近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

別邸はヒツソリ閑と山茶花咲き　宇部市　上林　粗影
ひばり浩二残して女子寮は正月　同　同
仙人掌よなんぼ咲いても独身者　同　同
精力の後の卵は植木鉢　同　同
威厳にはならず巡査の赤い羽根　同　同
参観日行儀の悪いパパがくる　大阪市　早川　野市
ピイチクパアチク敬老会の貸切車　同　同
√集金人店主ほどにはお辞儀せず　同　同
税務署のサービス晩まで出ます　同　同

再び大阪へ帰る

水道の香も大阪のものと知る　同　同
一人子へバスコンしてることにされ　石川県　中松　恒雄
継ぎ当てる様に大臣交代し　同　同
ひびの手で嫁して来た日の琴を弾き　同　同
再軍備蟻の行進見ていたり　同　同
お年始に歳暮に上げた酒よばれ　同　同
餅花をつるし稽古屋らしくなり　大阪市　板東千代美
母も来ず恋もまだ来ぬ湯がたぎり　同　同
羽子板にしたらと思う恋のひと　同　同
桜でも咲くかと思う十二月　同　同
特価市出たら師匠の顔になり　大阪郡山市　藤田　凡々
いい難いことが縫目を細かくし　同　同
日本間のベッドも趣味と云う男　同　同
おトマイパパ今夜も酔うて戻ったり　同　同
御利益で愈えた病気がぶり返し　同　同
酔漢をいなす手綱のあるマダム　同　同
猛々に酔えぬ新生活の春　兵庫県　出口白猫児
放送の謡初め聞く正座なり　同　同
鶏の催促受けている炬燵　同　同
花嫁は親が選んだモーニング　同　同
買うほうが安いと云うて足袋をつぐ　同　同
ファボールでやっと主任の椅子につき　大阪市　半田　夏生
貸衣装脱ぎ捨てさっと旅に立ち　同　同
恋文に晶子の歌を引用し　同　同
恋したかこの頃ナース赤い唇　同　同
入院の課長は見舞山と積み　同　同
麦も草も芽が出て村の十二月　愛媛県　村上　旭童
よく釣れた日の弁当は残して来　同　同
小便の湯気をもったいなしと見る　同　同
買えぬものばかりの並ぶ農具展　同　同
封切は逃さず初老夢があり　神戸市　小浜　牧人
クリスマス老眼鏡を子に貰い　同　同
茶羽織は臙脂ロビーの目をあつめ　同　同
柔らかい手をして恐い事も云い　同　同
入院料になる年金をうらやまれ　貝塚市　平山　港雨

幸福を幸福に（三）

戸田古方

美しきもの

今日は娘の成婚一ヶ月目、内祝のくばりものをかゝえていたので梅田からバスにのりました。久しぶりに見る御堂筋、ビルの間からさしこむ朝の陽にかゞやく色づいた銀杏の階調、通りすがりの眼を楽しますだけで、銀杏だけを見にきている人があるとも見えません。彩管に止めたく、カラーフィルムを持合せてないのが残念でありました。

箕面や高雄の紅葉はハンドレッド・エー・ワンの美観でしょうがそれをたずねるいとまをもたぬ私、負惜しみでなく頭の下る思いをさゝれたのはこの銀杏です。この美しさこそ川柳の美じゃないのかと思えるのです。

そう見ていますと散りしいて半ば朽ちようとしている落葉の方にまでも眼が行くのです。

ルネサンスから発展して来た自然発見の精神は十九世紀に至りましてリアリズムと花咲き、路傍の石一個に美を見出そうとしたのです。馬糞の美しさをも教えてくれました。

この数日カメラハンドブックの増刊「今日と写真」を読みつゞけています。マスコンミュニケーションとしての写真、写真の生態、

義損金募集女給も又募集　同
新生活賀状の追加二千万　同
停年も近いに娘出戻って　同　仲どんたく
せまき門ストーブリングがうるやませ　神戸市
義士祭GIがりの主税も居　同
デモ隊、サンドイッチマンが道をあり　同
年末の赤字圏米下ってもピンと来ぬ人の相手も世渡りの　大阪市　同　藤村　梨花
お流れを頂戴しますがあばれ出し　同
飲めぬのが隠し芸だけ見せに来る　同
夢のない女のひとみ透き通り　同　福代天邪鬼
新妻の倖アイロンよく働き　米子市　同
ため息も親娘の別なファッションショーカナリヤを鳴かせきれいに女病み　同
淋しさに師走の人出に交ってみ　同
母の手へとび込む様にスベリ台　大阪市　同　本多　省三
インターン竹になるのも骨が折れ　同
就職もさせず卒業寄附はとり　同

姪結婚

礼福を背一杯に発車ベル　同
とっておきですと屋台で酌いでくれ　奈良県　同　建沼康之介（伊等以め）
ボーナスが出る〳〵恋のプラン派手　同
集金から戻れば集金待っている　同
かちとったアルファーだりを飲むとする　同
鈴の鳴る下駄でやっと我慢させ　倉敷市　同　野田　一念
婿候補易々諸々と従いて行く　同
格子なき牢獄へ駄々こねて嫁き　同

申年が来るので理想下げて嫁き　同
夏やせを女優のヒップとくらべて　天理市　同　仲野花鶴美
美容師のヘップバーンはのびており　同
泣きにゆく母へ子供はついてゆき　同
叱られた娘台所がちやつかせ　同

退院

肋無しで帰える巷の風厳し　兵庫県　同　吉原　紅月
ジングルベル斗病の身を焦立たせ　同
破産した家に山茶花咲乱れ　同
居るとこがなくて来ました映画館　兵庫県　同　小西富士子
懐工合無視して正月やって来る　同
妻くさす程はかいしよのない男　同
夏と冬包んで家出駅に佇ち　貝塚市　同　護川　梢月
附添をとられ瓶詰ばかり喰べ　同
舞の所作真似て愛人引き止める　同
おもいごとお師匠はんは冷や呑み　貝塚市　同　河楊　梵鐘
魅力あるにしかず新柄買うてやり　同
年玉のように叱言がみなへ来る　同
老いにけり電気按摩の椅子に寝る　滋賀県　同　土守トン坊
寝返りをするわと云って寝返られ　同
艶のある肌へ灸師が熱さ問う　同
売出しが済んでも値段そのまんま　大阪府　同　赤塚　楽天
押売の断り上手妻も老け　同
おっぱいが贅と解ったホテルの灯　同
観劇に出嫌いの母連れて出る　大阪市　同　堤　勝三
仲のよい二人へバスの来ぬもよし　同
通勤のアクセサリーに文庫本　同

世界語としての写真、そんなことがこの増刊誌のねらいなのですが、それらは写真技術のよくわからない私にも興味を引いたのです。

写真が発明されて絵の世界はすっかりその目的とテーマをかえました。肖像画はすたれ、リアリズムからシュールリアリズムへ、そしてマチスとなり、ピカソとなったのです。私にはそれらの先覚者の絵がよくわかりません。画家たちは自然主義的、合理主義的写実、見えたものを見えた通りかくのから、目に見える真実でなく、心に感じる感覚の真実をうつしとっているのだといわれます。そういえば今日子供の習っている絵ではデッサンは二の次、三の次です。それでけっこうすばらしい作品をつくっているのです。昔から絵を学んでいるものは手も足も出ない現状です。

「今日の写真」は語ります。絵のような写真、これをサロンピクチュアとかいうのだそうですが、それは写真界では人気を失い、すたれ気味だということです。写真に於てもシュールリアリズムはありますが、一方、第二次大戦後、活潑なリアリズムの復活です。切れのするどい、鮮鋭度の高いレンズがことのほかよろこばれ、写し出されるものは瞬間の真実を把えるスナップ全盛です。インドシナ戦線で死んだアメリカのキャパの

採用の合理化案で馘になり　山口県　安平次弘道
修身の様な亭主で物たらず　同　同
財産があるので良縁とはおかし　同　石川ひさみ
お見合のように恋から来る写真　山口県　同
向き合うて数の子喰べた人も来す　同　菱田　満秋
リキュールを買って待った日を思い　天理市
信念が動き変人呼ばりされ　同　淵川　秀敏
キスしても落ちない紅をプレゼント　同
大学へ行けばどうなときやあなたい　同　山本　春也
お送りをしたい女が怖がらす　熊本県　同
新家庭地下足袋までも新しく　同　津田　千舟
愛人へまだ農業と言えすいる　同　同
先輩のちからを別れるときも借り　倉敷市　同
賃借りの植木と知らす賞められる　同　津田　千舟
唇のヒビが笑顔を小さくし　同　同
授業料溜め易く学成り難し　貝塚市　同
療友に風邪をうつして風邪治り　同　同

秩父宮妃よりバラ御寄贈

四方拝患者一同バラ拝み　同　同
十円の価値も身に沁む手内職　大阪市　伊藤　定美
産むだけの親に不幸な子が揃い　同　同
婚約へ男性観がまた変り　同　同
菊作る父に家中使われる　新潟県　高野むじな
来年は猿ともかくも式をあげ　同　同
札のしわのばす役目もある銀行　同　同
冬の月石もくっきり影を持つ　松阪市　万濃　修
押売りは撃退寄附はおじぎする　同　同

仏様の前で蔭口派手なこと　同　同
ビタミンをうってハンスト二日間　岡山県　佐藤龍山坊
人形があるアパートの台所　同　同
学は成りたれどアルバイトやめられず　同　同
ジングルベルお稲荷さんは何んさまく　倉敷市　藤井　五茶
ボテイビルまず台所から苦情が出　同　同
ボディビル頭の中身はどうする気　同　同
奥様もたまに内緒のある電話　滋賀県　中島　可十
座談会自分の番で喫いつける　同　同
残念さ父には言えぬ男の子　同　同
親馬鹿という眼を息子知って居り　岡山県　太田　蓑流
差押えせよと先手を打たれて来　同　同
担ぎ屋が歳暮を呉れた台所　同　同
糟糠の妻をみなおす長襦袢　大阪市　桝本みのる
婚礼に来てさえ坊主は南無阿彌陀　同　同
日曜日寝床の中で子とさわぎ　同　同
若い日の写真親父も話せそう　笠岡市　木山　遠二
百までも生きて畳で終りたし　同　同

「二等兵物語」を観て

泣け〳〵と消灯ラッパ鳴りひびき　鳥取市　北村　三歩
十五年前の大阪を嗅ぎまわり　同　同
高原の焚火遭難よみがえり　群馬県　荻原　竹郎
万歳をじっと見送るマンボの娘　同　同
泥棒の足型僕の足に合い　宮崎市　野口卯之助
民主主義とは上役をつるし上げ　同　同
警察は夫婦喧嘩も器物毀棄　岡山県　藤原　秋月

作品をほめたゝえております。キヤバは死ぬ前、日本にしばらく留って日本人の見落している日本人の姿を恐ろしいまではっきりと見せていってくれました。その当時の新聞にずい分たくさん紹介されたことを思い出します。

一体写真というのは造形の手段であって、即ち芸術写真ではありません。しかし人間の心を通して作り上げられた作品には所謂従来の芸術という考えでは割り切れなくとも何等かの意味で芸術といえるのではないでしょうか、今日私が扱ってみたいのはその点です。

今ニューヨークで開かれ、来年は日本へも来るはずの「人間家族」写真展というのがあります。そのアルバムを見る機会を得ましたが、それは世界各国から集った数万枚の作品から五百余点を取り上げたもので、いわゆる人間の生態写真展なのです。恋愛、結婚、出産、家庭、社会のいとなみ、そして老いにいたるたくみな編輯がこゝろみられ、皮膚の色で人間の差をつけない、相異る環境、風俗はもっていてもみんな同じ人であること、世界永久の平和を念ずる善意の人々によって企てられているのです。一枚一枚を見ると所謂芸術写真も、そうでない単なる報導写真のようなものもありますが、いずれも美にかゞやき、綜合された全体が今までの美を越えた美し

凧上げへ手を貸し童心よみがえり　同
菊一輪生けた気持で嫁くつもり　大阪府　岡島　孤舟
蚊の涙これで正月しろと云う　同　小島さぎす
エスカレーターせわしい顔でなし　貝塚市　同
痰を見る癖がなおらぬ恢復期　阿部かつみ
給食と云う冷えかたの雑煮餅　貝塚市　同
煌々とボーナスを待つ社宅街　大町　別城
火吹竹文化に遠い灰を浴び　岡山県　同
楽屋裏保守対革新よりも金　堀内　乱酔
ボーナスが鶏小舎になっちまい　倉敷市　同
滞納はしても正月餅は喰べ　山本　立児
家計簿は年末調整まで見込み　大阪市　同
根がなくなってと人間文化財　飯尾寄与史
ズボンなぞ買うていつまで嫁かぬ気か　神戸市　同
父さんのきげん浄瑠璃いがんで来　前浜嶮多路
捨てられて帰った日からよく稼ぎ　七尾市　同
仕事にはせぬはち巻をデモで締め　堀　須賀太
どもりの言訳こちらが気をきかせ　大阪府　同
イヴの夜シューシャンボーイの手の赤、　竹内花代子
ラジオもう子の宿題へ切ってやり　大阪市　同
腹の立つ時にラジオのチャッチャッチャ　杉本たつ子
サンデーを課長の供に選ばれる　岡山県　同
エンジンの音集金が入って来　久家代仕男
高説を妻は笑うてとり合わず　平田市　同
病状には触れず原爆憤り　宗原　箔川
ガム噛んだ儘でウインクして別れ　宇部市　国弘半休氏広鉄局栄転
下積みが今持ち上げた廻り椅子　同
豊作が続いてほしい娘が五人　和歌山県　木下　一休
合併は急ぎ吊橋切れたまゝ　同　平光　峰豊
ボーナスも千々に砕ける年の暮　倉敷市　同
愛妻の指揮に従う日曜日　越智　一水
女房がちと若返える米の出来　今治市　同
梅活けたゞけで喜ぶ妻の初春　三好　澄泉
金に身をまかせて女衣裳もち　大阪市　同
アパートに住んで飯屋に顔が利き　山田スミ子
ボーナスで借金返す案を練り　廣島県　同
大掃除埃あるのでかいがあり　岩田天保銭
全身に此れも生んとする灸の跡　鳥取市　同
主婦の声豆腐が下り牛乳を下げ　高島　玉兎
嫁ぐ娘に当座の智慧が授けられ　廣島県　同
新大臣愛誦の座右一句持ち　松永　恒青
病人へ相談に来る十二月　金沢市　同
交叉点コラとも云えず笛を吹き　丸川愁電子
内助の功表彰されて表に出　神戸市　同
黒田節唄ったやつが先ずのびる　前川左文字
雨漏りは勘定になかった家を買い　兵庫県　同
どうもこうも鼻までつまった十二月　横山　生二
口紅の濃さまだ〳〵働く気　倉吉市　同
金でみな仕末がついた十二月　小田　紫草
製粉所蠅まで白うなって飛び　岡山県　同
舞扇君の視線を受けて立ち　岡崎　一也
何はさて子の居る倖せ除夜をきゝ　岡山県　同

さにつゝまれています。世界の人々の美を追う眼がかわって来たことを教えられます。

五七調、七五調にならべるのは言語発表の手段です。その中に川柳があり俳句があります。そして川柳や俳句は写真に於ける芸術写真のような立場に立っているのです。いわゆる詩を持っています。

私は詩とは真善美の追求だと考えています。川柳の穿ちは批判美ということばでよべないかと思うのです。真善美の調和は勿論のことながら、批判美に於ては真なるものより、美なるものより善なるものへの比重がより大きいのではないか、真善美一体と見てこれ又広義の美なるもので綜合され得るのではないでしょうか。

銀杏の美を俳人は俳句の世界にもちこむかもしれない。しかし用目的の美、流線型とか、硝子の家とかリビイングデザインなるものは近代の到達した最もすぐれた感覚です。美です。近代メカニズム道路の要具としての銀杏、そしてその使命をはたして散りしいている満足した安らかさ、こゝまでくると美よりも善の部類に入れてみたくなるのです。

流線型や近代建築の美しさは整理された美しさです。と同時に人間への奉仕の最高の姿でもあるのです。映画や小説も現実の人間生活の複写ではありません。ことに

恐妻に心臓肥大症とかや　同
流行は砂糖買いにもオートバイ　倉敷市　岡野風の子
すき焼はお隣りだった腹の虫　同
建増した廊下うれしい雲に座し　西宮市　徳永　貴美
二次会へ行く顔ぶれが柿を喰い　同
相談欄ロマンスを割く義母があり　米子市　勝田　正郎
大の男で牛乳を飲みつづけ　同
真相を知らない下っ端のさわぎ　大洲市　米沢　暁明
陳情団みな赤い羽根つけて来る　同
クラス会オールドミスの派手な服　東京都　下岳　周村
山小屋へチャンスと口紅忘れずに　同
美しい指手袋のない女　今治市　越智　義夫
おらが国瀬戸内海の初日の出　同
再婚の肌に冷たい貸衣裳　大洲市　横田　放人
課長ひまめがね外してパイプ研ぐ　同
吹殻の長き衣食の足るを見る　岡山県　東　静人

祝一門君の結婚

丼も二つ今日から差し向い　同
袋貼る母大学へやるつもり　玉野市　星川　陽石
発展へ村が半分ダムになり　同
まだストの社があり小さく年忘れ　益田市　木村柳心児
もう一度底をのぞいて土産にし　同
わたし今日生理休暇にしといてね　大阪市　武部　若菜
風邪引いてますのと薄着する若さ　同
探す字がないから辞書の定価みる　米子市　湯原　一机
役所では七輪の火も風呂も焚き　同
瀬戸火鉢われてから大事に扱われ　新居浜市　加藤　向水
三里灸仲間にはいる歳となり　同
娘のにきびどのクリームも合わなくて　兵庫県　永尾　英断
気兼ねした声で喰うだけ喰う去に　同
ミス職場の声を遠くにまだ勤め　宇部市　平田　実男
ためいきの中にファッションモデル立ち　同
大根の青さ眼に立つ霜を踏む　岡山県　池上智恵美
ちび下駄のまんま角まで娘を送り　同
足どりも師走のリズム俺も合い　大阪市　池戸　桃村
声変り親の丸がり気に入らず　同
会えばすぐ帰る〳〵と悪い癖　堺市　田中　狂二
女房に敷かれ女課長に又敷かれ　倉敷市　山本　閑人
退院へもう呑む方を注意され　長崎市　原　牧童
女患部屋就寝前のクレンジン　貝塚市　杉本　一鶴
祖母の手をひく少年に道をあけ　貝塚市　阪本阿季良
保険屋の世辞が過ぎたかことわられ　兵庫県　前川　越山
検問をよけて無免許飛六法　伊丹市　小川静観堂
社をやめて歳暮きっちり廃止され　神戸市　傍島　静馬
捨てるには惜しいピンボケ貼っておき　大阪府　三谷　聖聖
M過剰むこうの母の気に入らず　岡山県　梶尾　節子
螢光灯つけて天井のすゝ払う　高槻市　吉田　季生
母さんの貯金は鶏が産んでくれ　岡山県　池田　文女
袋ごと貰えと婦人誌いらぬ世話　出雲市　石橋万古人
貸してやる金借りに行て断られ　西川　晃
灰かぐら立たせて置いて平和論　宇部市　上杉　雪峰
濡れ手で粟の話に故郷を捨て　岡山県　宗森とも子
三流館名画へ二度目の顔で来る　石川県　塩谷三思桜

短詩型ともなれば最も極端に整理が試みられなければならぬと考えます。真なるものは愚な忠実をさしているのではありません。真なるものをそなえ、善なるものを抱き、美を求めて進む目標は聖であります。神の世界、仏の世界へ合一することなのです。

可笑味の句

心太ひよろひよろひよろとかしこまり

の中にも

穿ち味の句

人に物たゞやるにさへ上手上手

の中にも

真実味の句

にわとりがあくびをしたとつんぼいい

の中にも

軽味の句

淋しいも秋おどろくも秋の空

の中にも聖、即ち最高の美がふくまれています。しかも引用したのは、そうした自覚をほとんどしていなかった古川柳ばかりを選んでみました。今さらのように川柳の詩を、川柳の美を見直すとともに、ほんとうに美しいものとは何かと考えなおすのでした。

本日第十二回成人学校川柳科の終講式後の茶話会で受講者の方々にこんな話をしましたので一文にまとめてみました。

——三〇、一一、二四——

成功をすれば故郷の山綺麗　玉野市　小板つよし
呑めぬ酒干しを痛手をしやべり出し　高知市　小松　梅林
お歳暮の配達夫にも頭下げ　尾崎市　中尾　すず
苦心した歳暮あっさり礼言われ　尾崎市　林　澄子
しなさんな言われゃしたくなる歳暮　尾崎市　久谷　朗留
掛声の程には搗けぬ祖父の杵　尾崎市　八田　弘
お見合がすんだとたんにヘイマンボ　倉敷市　矢吹十九一
女事務にそろばん頼む大学出　堺市　辻　圭水
裏面史のもう一つ裏面がありそうで　大阪府　浅野　飄太
レター呉れず小包だけの愛し様　下關市　宗貞　白馬
掃除婦とも云えず流行服を着て　倉敷市　藤沢不二郎
立候補のうわさが立った寄附の額　島根県　景山　綾美
遊ぶ間があって忙しい筆不精　兵庫県　辻　文平
賃餅はかけ声ばかり派手に搗き　呉市　青木　微酔
集合の時間へ名士だけおくれ　七尾市　松高志宇歳
丹前の袂へ千畳敷の風　大阪府　青柳扇子仙
押入れをベッド代りの子沢山　柏市　堤　ちゑ
もうみおつくしかと独身本をふせ　岸和田市　金子　紀人
たかが子の意見が妙にこびりつき　倉敷市　奥村　久寿
漬物の味は先代からの味　大洲市　堀内　暁風
助け合い募金落ち着く音を聞き　今治市　池内　好日
すき焼の匂いが門まで迎えに出　岡山県　沼田　三六
退職金予算通りに役立たず　倉敷市　笠原　亀庵
事始めあの妓もこの娘も名取です　芦屋市　里田一ン十
学資だけさせて年増を逃げてゆき　笠岡市　木山桃仙坊
旅行してコケシが増える違い棚　大阪市　熊本　黄蛾
門松を止め正月の呑っぷり　石川県　林　古意知

陳情に故郷の蜜柑もおともする　和歌山県　田中　雄峰
人様の晴れ着文化の日に仕上げ　岡山県　野々口美舟
二階にもひと世帯ありアース線　鳥取県　鈴木村諷子
休んでる椅子へ教師の目が淋し　岡山県　殊井　夢川
行楽に揉まれ職安所へそれ　和歌山県　岡本　三楽
高利貸になれる口調を持ち合せ　青森県　森本黒天子
浮浪者も保護法少しかじって居　今治市　中川　堯二
一年の浪人位と大先輩　大阪市　中村　放生
面会と夢に見る子と違う丈　岡山県　阿部　四郎
簡素化の実践という寝正月　岡山県　松島　不在
お小言を云うよりきつい咳であり　大阪市　仙波　杏子
返り咲く恋の白髪を染め初め　岡山県　舞島　白露
智慧の輪へ末子の根気見直させ　岡山県　佐々部　蕭佐志
生涯に日曜のない斗病記　岡山県　及川　南洋
軍隊衣そのまゝ着れるからだで病み　岡山県　野田ポン太郎
貸衣粧あつらえむきとほめて着せ　大洲市　尾花　清美
麻雀に旗日の旗を入れ忘れ　香川県　香川　雅人
負けん気が強いが釘の折れを書き　笠岡市　佐内　隆文
ボーナスを虚栄の虫に喰い込まれ　岡山県　大石　一久
ラーメンをすゝるリズムもジングベル　姫路市　植村客遊子
煙草ばかりのむなと先輩注いでくれ　大阪市　増本　夢人
板前がうしろを向いてクシヤミする　岡山県　富池　茂人
雑音も都会に負けぬ農繁期　大洲市　富永　建朗
女性ばかりの二次会アイスクリームにし　大阪市　中谷ハナ子
早や浮気親に背いて添うたのに　大阪市　北野　水楓
恋をするネクタイいつも締り居り　宇部市　神田　豊年

鏡と女性

伊藤定美

私はいま鏡と関連のある言葉をこゝに拾い上げてみました。空虚、反省、自信、虚栄、憧憬、慾望、夢、憂愁、悲哀、こうした言葉が人生の喜怒哀楽を物語っている様に、鏡と云うものが、何か人生の縮図を反映してでもいる様に思われます。そして其れに連なる表情も百面相に近いものがあると思います。表情は寧ろ心の中にあるものを表わすと云うよりも、外からの刺戟によって皮膚だけが反応したと云っても過言でないと云うことを或る書物で読んだことがありますが、女性の粧いと美の根源をなしているものは矢張り鏡に写し出される容姿からではないかと思います。若し女性から鏡をうばい去られたら、そこには自惚すらなかったかも知れません。富と慾望が失われ断念と失望に明け暮れている人が果して鏡の中の自分をキャッチして見る事が出来るでしょうか。若し女性が鏡に反映する美を忘れたとしたら、女性の幸福は寧ろ夢から程遠いものではないでしょうか。人間は常に美しいものへのあこがれを持っていますが鏡と共に明け暮れる女性の生活の中に、きた心の鏡としての反省を求め得られたら更に一段と美を加えることが出来ることでしょう。

高橋操子さんを訪ねて

（女流作家訪問記12）

丸尾潮花

川雑婦人友の会岸和田支部長としての高橋操子さんを、野田町のお住いにお訪ねすると、玄関先で先ず私の眼を捕えたのは路郎先生の短冊（酒とろり　とろり大空のこころかも）の句である。通された客間にはお父さんの筆になると言う（時こそ金　正しく使うこころこそ神とまじわるこころなりけり）の軸が掛けられ、右手には、人形ケース、奥手には琴が立てかけられてある。人の子の母として毎日夕星の空にきらめく頃まで呉服の行商に出ていられるところの男勝りの操子さんは川柳の為に生き、川柳の為に救われていられるそうで麻生教信者の一人である。応接台を挟んで茶を進めて下さる操子さんは柳歴二十六年と言う強者、先ず私へ一問、先手を打って来られる。

「潮花さんにお逢いしましたら一番先にお聞きしようと思っていたのですが」と前置をされながら

「最近ね新しい句、新しい句と言うて新しい句を好まれる選者の方がありますけれど、新しい句と言うものに対しまして潮花さんはどの様に考えていられるでしょうか」

「そうです。私もそうした言葉をよく耳にもしています。でもね、無暗に新しい句だと言って川柳としての味のない、川柳から飛び離れた様なものや流行語をやたらに使ったりしたものを新しい句として取りあげていられる選者もある様ですが私はそうした考え方には反対ですし、そうしたものが新しいものだとは言えません。新しい句と言うものは、新しいセンスで作った句のことを言うのではないかと思っています。」

「そうですね私も同じことを考えていました。新しい句として入選をしていられる句には川柳の持味が非常に乏しいものが多いですね。それにとても軽卒に流れていると思います。そこへ行きますと句は古いと言われるか知れませんが、古川柳には大変いい句が有りますね。」

「情のある句が有りますね。」

「私、豆秋さんの句も好きでした。平々凡々としたところがね。それに、ひさみさんの句でね（落選をして落付いたなどと嘘）と言うのが出てましたね。あれなども好きでしたし、葭乃先生の有名な（呑んでほしやめても欲しい酒をつぎ）あれなんか、とても妻としての気持が句の上によく出ていて教えられるところが多いと思います。川柳家の奥様でなかったら生涯を川柳に一貫した生活をすると言うことはむつかしい事でしょうね」

「そう言うことが言えますね。其の点葭乃先生は恵まれていられると言う事になりますね」

「羨ましいと思った時がありました。路郎先生は時々尋ねて来て下さるのですよ。先生が来て下さると里の父が来て下さった様に思えるんです。人情味のあるいい先生ですね。路郎先生が本当の川柳家と言うのやなあとよく思うのです。或る古い川柳家ですけれど川雑の方ではありませんが、路郎先生は門下の方を育てて行かれるのに御自分の腕に抱きかかえる様にして育てて行かれる、あゝしたところの愛情は他の柳社の主宰者には見られないと言っていられましたが、本当にそうだと思っています」

「私などもその腕に抱かれて二十年とても甘えたり無理言った一人なんです」

「葭乃奥さんもいい方ですし本当にお揃いですね」

「そうですね、時に操子さんの処女作を伺いましょうか」

「処女作と言われると困りますが良之祐さんの選ではじめて天に抜けた句が（勉強をなさいと窓をしめられる）と言う句でした。これは選者から賞品として風呂敷を送って貰いました。これが私の川柳狂の始まりです。川柳熱に浮かされた私にも悲しい思い出があるのです。それは或る正月の一日に一と晩の患いで子供を亡くしましてね。子供に熱があるのに句会に出て行きましてね。いつでもお母ちゃんはボン〳〵が痛いからお医者さんへ行って来るとか、お土産を買って来てあげるから待っていてなど嘘をついて出かけたものです。その当時には句の調子もよかったものですし、川柳に野心も手伝っていたのでしょう。句会から戻って見ますと大変な熱なのです。驚きましてね。でもたった一と晩で死なせてしまいました。四つでした。私は位牌の前に坐って、もう川柳はしないと泣いて詫びました。それから一年間と言うものは子供の事ばかりが気になりまして黙々と浮かぬ日を過しました。家庭を持つ女性には矢張り、家庭の責任と言うものを考えねばなりません。其れからは、子供を連れて行くと言う様にしました」

と川柳生活の思い出を話して下さる操子さんは思い出から覚めた様にふっと淋しい笑いをなさる。

「岸和田にも女流作家は相当に居られます。私は常にもっと〳〵女性の方が川柳を理解して下さる様に努力しています。川雑友の会は葭乃先生が御指導下さるのと、潮花さんがお世話下さるのでウンと努力をして見たいと思っていますけれど潮花さん放ったらかしにしない様に頼みまっせ」と大きな声で笑われる。

「操子さんはどの様な句を作りたいとお思いになります」

「矢張り人情の深い句なんです。脇田梅子さんの選で豊年と言う題が出されましてね。（豊年の牛は矢張りたたかれる）と言うのを作って出しましたら天に抜けたのです」

「いくら豊年でもね」

この辺で操子さんとお別れすることにしました。

一路集

陳情

戸田古方選

陳情の成果を酒席で確認し　一机
陳情の橋ケタまでは出来上り　春也
陳情の背で乳呑子よく眠り　同
陳情へ大臣案外愛想よし　立児
陳情をまずするときめ散会し　静観堂
一日市長早速陳情もちこまれ　恵二朗
はるばると来た陳情の五分間　鳥石
口下手は陳情団のビリに居る　草柳
陳情は本文ぬきで判をとり　星浦
陳情の裏から行くは直ぐ帰り　香林
陳情の現場と図面くい違い　木魚
口々に陳情ぐるりから喋り　十悟
この位じやろと陳情山をかけ　同
夜が明けて陳情蒼い顔で去に　初甫
酔さます間陳情待たしとけ　堰子
陳情に任せ工事は進められ　賀峰
陳情で話上手が笑わせる　同
陳情に佐倉宗吾の世を想い　葉光
陳情公開斗う筆の字が荒し　同
陳情の案を車中で練り直し　貴美
陳情で女は巧くまるめて来　隆文
反対派からも陳情してもつれ　藤波
陳情の参謀という政治ボス　藤波
可愛いゝ陳情団の後に大人が　満秋
死か生かその陳情へ煙草の輪　実男
陳情に被害写真も添えて出し　天邪鬼
陳情のたんび文才おだてられ　春日
ソファーへつつましく掛け陳情し　恒雄
陳情をそらさぬツボも覚えたり　千容
陳情団国の苦境も聞かされて　天保銭
陳情の進物デパートほどに積み　雷山
陳情の土産を秘書は捌き捌れ　同
陳情書採否は別に受付ける　正郎
陳情団首相は睡い目をこすり　雄声
土曜日の午後も陳情あきらめず　高志
陳情は給仕に会釈して通り　文平
陳情の陣頭に立ち醵金せず　へとち
東京まで行く陳情は人をより　圭水
お茶菓子も出て陳情が通りそう　代仕男
二重橋土下座がしたい陳情団　三思楼
台風を待ってたような陳情団　英断
陳情をすることにして場をおさめ　とも子
選挙区の陳情団に草疲れる　十九平
陳情は役所をぐる〳〵歩かされ　五茶
陳情は花の四月に行くと決め　三林坊
陳情のこゝで出る番紅一点　芳仙
(五)陳情へ休格の良い秘書が出る　賀峰
(五)陳情は皆もっともな事を言い　実男
(五)陳情のラストの署名恩師の名　へとち
(五)陳情へ紹介状をたんと持ち　十九平
(五)なんの陳情か署名させられる　五茶
(人)血判のある陳情へ座り替え　芳仙
(地)灰皿の下敷となる陳情書　夜潮
(天)陳情書わたして君と僕の仲　扇子仙

預金帳

田中鳥雀選

残高のない通帳も大事にし　圭水
残高は利子だけ残る預金帳　むじな
お互にへそくり合ってる預金帳　王公
臨終の間際に出した預金帳　代仕男
エプロンに小さく仕舞う預金帳　三思楼
預金帳積めば下すが惜しくなり　高志
預金帳持って簡素な式を挙げ　とも子
へそくりを定期に変える預金帳　越山
禁煙の決意の硬さ預金帳　三六
へそくりは他人名義の預金帳　微酔
魚屋の出す預金帳鱗つく　夜潮
ヒスられて無茶苦茶になる預金帳　美舟
預金帳家を建てたい夢を持ち　トン坊
預金帳おやつ代入れ別な菓子　光二郎
預金帳出て兄弟がいがみ合い　柳叟
臨終へ息子に渡る預金帳　初甫
預金帳預ける顔と下す顔　実男
つり銭で妻が楽しむ貯金帳　雄々
心中の一家残高なき預金　雷山
預金帳流用したを子に知られ　どんたく
嫁ぐ日のハンドバッグに預金帳　晃康
預金帳修学旅行の夢を乗せ　貴美
蓄のみ蓄のまゝ逃げて出た預金帳　十悟
窓口にくど〳〵老婆の預金帳　草柳
預金帳見付けたドア開けて呉れ　堰子
大晦日子の貯金帳のぞかれる　芳仙
大学へ子供やる気の預金帳　雄声
預金帳羽振利かせた日の名残　恒雄
預金帳株買う甲斐性なくて無事　一机
預金帳子を大学へ入れる夢　井蛙
出して来た預金に少し悔があり　賀峰
払出し欄がせわしい預金帳　木魚
懐ろへにやりとしまう預金帳　ひか平
預金帳たゝき付けてのすゝり泣き　同
独身で通すつもりの預金帳　可歴
添うてから出してばかりの預金帳　同
十二月あらためて見る預金帳　三林坊
昔なら利子で食えたと預金帳　光郎
縮緬の袱紗から出す預金帳　藤波
貯金帳マッチが乗ってカウンター　立児
釣銭は皆んな子供の預金帳　五茶
預金帳置場に困る程たまり　鳥石
かくし場を忘れた母の預金帳　同
残高に理想が叶う日の近し　晴芽
独身の頃がよかった預金帳　正郎
預金帳心のたすき示す額　豊年
(佳)送金の子の名で母の預金帳　葉光
(佳)番台に又笑われた預金帳　五茶
(佳)預金帳行李の底で増えて行き　良坊
(佳)子宝の無いが悩みの預金帳　恵二朗
(佳)預金帳商売人に嘲われる　万古
(佳)預金帳出す日が続く市場籠　晴芽
(佳)小切手で出す別口のある社長　同
(佳)預金帳寝床に敷いて独り病み　鳥石
(佳)はずかしい病気に預金出しつくし　賀峰
(佳)損をする株と知ってる預金帳　同
(人)預金帳持つ気強さが折れて来ず　十九平
(地)預金帳小さき秘密抱く女　晴芽
(天)預金帳子へ一筋の貢仕事　良坊
(軸)手掛りの指紋が薄い預金帳

源頼政（四）

――高倉宮陰謀――

冨士野鞍馬

「平家物語に」

「さてこそ三位はしたりけれ。やがて出家して源三位入道頼政とて、今年は七十五にぞなられける。」

とあるのを川柳は、

いつなんで剃ったかしれぬ源三位　（万安七）

と詠んでいるが七十五歳は、治承二年である。

あたまをまるめて頼政いらぬ事　（タル十八）

この「いらぬ事」というのは、治承四年（一一八〇）七十七才の頼政は、高倉の宮の陰謀に加担したことをいうので、

かぶとをぬぐと宮方は坊主なり　（タル十三）

ともよまれている。

高倉の宮というのは、「平家物語」に

「その頃一院（後白河法皇）第二の皇子、以仁（もちひと）の王と申し〻は、御母加賀の大納言秀成の御女なり。三条高倉にましましければ、高倉の宮とぞ申しける。いんじ永万元年（一一六五）十一月十五日の暁、御年十五にて、忍びつゝ近衛河原の大宮の御所にて、ひそかに御元服ありけり。御手跡美しうあそばし、御才覚もすぐれてましましければ、太子にも立ち、位にも即かせ給ふべかりしかども、故建春門院（後白河院の中宮）の御ねたみによって、おし籠められさせ給ひけり。」

とあるように、不遇であった。兄は二条帝、弟は高倉帝である。また「平語」に

「かくてあかし暮らさせ給ふ程に、治承四年（一一八〇）には、御年三十年にぞならせましける。その頃近衛河原に候はれける源三位入道頼政、ある夜ひそかに、この宮の御所に参りて、申されける事こそ恐しけれ。たとへば『君は天照大神四十八世の正統、神武天皇より七十八代に当らせ給ふ。しかれば太子にも立ち、位にも即かせ給ふべかりし人の、三十まで宮にてわたらせ給ふ御事をば、御心うしとはおぼしめされ候はずや。はやはや御謀叛起させ給ひて、平家を亡し、法皇のいつとなく鳥羽殿におし籠められてわたらせ給ふ、御憤をもやすめ参せ、君も位に即かせ給ふべし。これひとへに御孝行の御至にて候はむずれ。もしおぼしめし立たせ給ひて、命旨を下され給ふものならば、喜をなして馳せ参らむずる源氏どもこそ、国々に多く候へ』とて申しつゞく」

と、頼政が、謀叛をすすめたことになっているので、川柳もそれを詠み、

木に餅のなるやうにいふ源三位　（タル十）

頼政は素人好きのするむほん　（〃）

源三位大きな智恵をつけ申し　（〃）

鵺を射た手ぎわに宮はふわとのり　（〃十一）

いい年でわるちゑをかう源三位　（〃〃）

古来稀なる頼政のむほん也　（タル十五）

ついほろびますとすすめる源三位　（〃十六）

そそのかすことも頼政上手なり　（万安八）

しかし、宮は、急に頼政のすすめに応じなかったが、小納言惟長という人相見が「位に即かせ給ふべき御相まします、相構えて天下の事、おぼしめし棄つな」といったので、それを、天照大神の御告なりとして、決心して立ったのであった。そして、新宮十郎義盛を行家と改名さして蔵人に任じ、四月二十八日、令旨を、東国の各源氏に触れさせるため、京都を出立させた。

夜ごと夜ごと通ひ来る源三位　（タル十一）

高倉を夜ふけて通る源三位　（〃九）

ひすべし〳〵と源三位に御意　（〃二四）

伊豆もよろしくと小声で源三位　（万安九）

信連と万事かけあふ源三位　（タル九）

伊豆は、頼政の養子伊豆守仲綱で、長谷部信連は、高倉宮の侍で、これ等の句のように、夜な夜な密議をこらしていたが、この陰謀を、熊野の別当堪増が知って、五月十三日に六波羅の平宗盛へ密告した。その時、清盛は、福原（神戸）の別業に居たが、怒って、「その儀ならば高倉の宮を搦め取って、土佐の畑へ遷すべし」と命じた。しかし、まだ、この陰謀に、頼政、仲綱父子が加担しているとは知らなかったのである。

頼政は、陰謀露顕を知って、高倉の宮に、急いで三井寺へ行き給え、自分もやがて行きますと通知をした。ところが、五月十五日に、宗盛の手勢が、高倉の宮を襲うたので、信連が奮戦する間に、宮は脱出して三井寺へ入られた。

ヒゲソリ後に
アストリンゼンは世界的常識！
1 生々した男性美をつくる
2 爽快でヒゲソリがたのしい
3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力！
明色アストリンゼン
桃谷順天館

八景を一つ抱こむ源三位　（タル二八）

三井寺は園城寺といい、近江八景の一つである。

「平家物語」は、又いう。

「そもそもこの源三位入道頼政は、年頃日頃もあればこそありけめ、今年いかなる心にて謀叛をば起されけるぞといふに、平家の次男宗盛の卿の不思議の事のみし給ひけるに依ってなり」

と記し、頼政の子仲綱の愛馬「木の下」を宗盛の所望で、六波羅へつかわしたところ、その馬に、仲綱と焼印して、馬を仲綱と呼んだ。この侮蔑に憤慨して、高倉の宮を勧めたといわれている。それをまた川柳は、

仲綱は傘屋のがきにばかにされ　（タル十七）

平家とは馬のあわない源三位　（万安五）

元馬の出入からさと茶師話し　（タル十三）

ていのいい馬どろぼうと源三位　（〃十九）

馬ぐらいやつたがいいと菖蒲いひ　（〃）

と詠んでいる。

五月十六日の夜、頼政は、自邸を焼いて、一族を引つれ、三井寺へ参じた。ところが、頼政の腹臣、渡辺源三競は、宗盛に仕えていたが、うまく、宗盛の愛馬「南鐐」を貰って、それに乗って、三井寺へ馳せ参じ、木の下を取られたかわりに南鐐を取ってきたと仲綱にいえば、仲綱は宗盛への復讐に、その馬の尾髪を切って「昔は南鐐今は宗盛入道」と焼印して、六波羅へ追い返した。

六波羅に焼鉄をした迷ひ馬　（タル一四一）

馬のつら傘屋とすでに書くところ　（〃十六）

傘はりのむすこと馬のつらへはり　（〃十五）

仲綱は宿札の有馬にのり　（拾五）

等と、それを詠んでいる。傘屋の子というのは宗盛のことである。

金泥集

選　乃葭　麻生

課題「片便り」

黙否権のように返事は来ないまゝ　梨里
人伝てに片便りさえ懐しく　阿茶
片便りの哀愁だんてチヤ〳〵〳〵　白香
長距離をかけて不在の片便り　湖月
おのろけの材料となる片便り　花鶴美
投函を夫が忘れて片便り　有子
きっと出すと云わはったけど片便り　三枝
あづさ弓引き放ちたる片便り　文子
この儘じや化けてやる気の片便り　知恵美
片便りだけでもしたい里の母　芙蓉
僕のこと忘れてほしい片便り　たつよ
ミリンでも呑む気になった片便り　千代美
返事来ぬ理由はこの春嫁きました　千永
片便り義理ゆえ腹も立てずおく　定美
カタログ進呈葉書出すのが面倒な　民子
片便り悲しい恋と諦める　都詩子
クイズ狂出して許りで返事こず　糸潮
予想した通りやっぱり返事こず　清子
片便りわかってくれたかと又便り　初穂
片便りうらめば怨になっていた　若菜
片便りこのまゝ消える恋なのか　同
郵便屋まで憎らしい片便り　きさ子
桜から紅葉へ移る片便り　同
出す身にもなって頂戴片便り　富士子
返信料までもいかれた片便り　同
片便りだけで結構用が足り　花代子
もう逢わぬひとになってる片便り　同
片便り不倫の恋と知ってから　同
片便りもう正月が来てしまい　貴洲
病気かと母も思てる片便り　同
片便り私に勝る筆不精　同

源平記

筆間独語

鞍馬

吉川英治さんが、六年前から新平家物語を書きつづけて、今度朝日文化賞をもらったのは当然のことである。私も六年前から、川柳源平記を書きつづけてきた。私の壇の浦も、一の谷も、吉川英治さんより先に発表している。吉川さんのは古典平家からの小説であり、私のは古川柳を基にしている。

この古川柳を摘出するのに、数年間を要しているのである。同じ古典を幾度も読みかえさなければ、多数の基本句は見つからない。一度通覧するにも、十二万句を見るのである。それを繰返す毎に、前回の見落した句をすこしずつ拾って、これ位というところで、その句について、他の参考書を読んで、興味をつけて、原稿にしてきた。

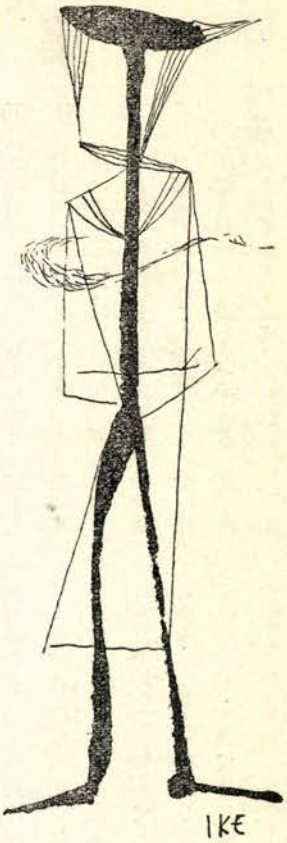
幸いに、この六年間、皆さんの御愛読を賜り、各方から激励のお言葉を頂いている。まだこれから、準備しているものに、木曾義仲と源頼朝がある。今書いている頼政も、六回位に亘るつもりでいる。

何れ、書いてしまったら、追補して単行本にしたいと思っている。またその節は、一層の御支援を願いたい。

川柳作家で、研究を続けている者は、私一人になってしまった。研究家は句を作らず、作家は研究をしない、ということで、ハッキリ、作家と研究家とわかれてしまった今日、両方へ努力を続けているが、どっちも未熟でお恥かしい次第である。

こういう間に、宝酒造会社の三十年史も、本年は、一応書いてしまうつもりでいる。

雑筆春秋



わしが国さで

河村日満

大阪から七時間半。京阪神方面の人々にはお馴染みの、湯の街城の崎を過ぎること二時間余りにして、宣伝下手、儲け下手の町鳥取駅に着く。途中汽車から、機上よりの気分を満喫させてくれる、陸橋では日本一という余部（アマリベ）の絶景と山陰路第一の温泉地岩井があるが、通り越してしまったのも宣伝下手の証拠。街中に、湧く湯を持ちながら、城の崎、玉津に名を成さしめて「ヘエー鳥取に温泉が？」はまだいい方。「鳥取てどこや」に至っては余りにも哀れである。かって大阪在住の頃。甲子園球場に出てきた鳥取一中の応援に出た僕の耳に。「トリトリ」てどこやという後からの言葉はいまだに忘れられぬところ。それをいまだにあちこちで聞かされるということの情けなさは、歯掻ゆさを通り越して口惜しさで一杯で、市へ、県への恨み（とは大ゲサな）ともなっている。止れ、湯どころ梨どころのわしが国さへ、今年五月には路郎先生夫妻をお招きしての、鳥取では初めての川柳大会を開くことになっているので、ここで一つ大いに鳥取の良さを吹聴して「よし、そんなによいところなら一ぺん行って見てやろう」の気を誘い出すことに成功したとしたら、僕としてもう思い残すこと更になしである。

さて、県庁所在地で市内に温泉のあるところは全国でもそう多くはない。というのが鳥取砂丘と共に自慢の一つ。駅前の温泉街には泉質を異にする数十軒の一流旅館があって、温泉情緒豊かに客を迎えている。市中には、豊臣秀吉の兵糧攻めで名高い久松山鳥取城址をはじめ、伊賀上野の仇討でその名を知られている荒木又ェ門、渡辺数馬の墓。それに鈴ヶ森は出合の場の白井権八。大阪落城にその名が残る後藤又兵衛の墓等、史跡と共に盛り沢山である。

先ず、こんな田舎にしては実際贅沢なバスで鳥取から二十分。貸切なら駅前からそれこそ横町の質屋までも教えてくれそうな、鶯のような声のガイド嬢の説明で、頭を右に左に向けながら新しく鋪装された道路を抜けきると、パッと眼の前が開けて、やっぱり田舎だなァーの景色も面白く、七曲りどころか二十いくつに曲り曲ってやっと山の頂上に出ると、眼下に鳥取が誇る大砂丘の一部と、お種さんの伝説で名高い「多稔ヶ池」が、昼なお暗き水底を静ませて看る者の背筋をスーとさせてくれる不思議なものを秘めている。

いよ〳〵バスは東西十六粁、南北二粁という鳥取が湯と共に誇る大砂丘へ着く。すでに有名な詩人、歌人が雲霞の如く訪ずれて、その度び毎に何十首の歌、又は詩を詠み残しているので或いは嚔ぐらいには知っておられる人も多いことと思うが、ここが僕としても、ガイド嬢としてもお客様への見せ場、サービスのしどころであるので、少し川柳も掲げて宣伝しておこう。

はるかなる砂丘は独り歩くべし　八歩

寝ころべば砂丘は淋し風に鳴り　同

鳥取の砂丘に佇てば異国めき　湖山

靴跡が四つ続いた砂丘ゆく　三歩

天女いま舞い下りそうな砂丘晴れ　素飄

鳥一羽飛んで砂丘の広いこと　茗人

砂丘にも起伏があって子が隠れ　日満

原始の謎を秘めて起伏するこの大砂丘は、日本唯一の内陸的砂丘で、其の表面に描き出される風紋は、大自然と風の作る一つの芸術として、その美しさは例えようがない。そして大小三〇に及ぶ摺鉢と呼ぶ珍らしい窪地を作り、またオアシスを生じ、砂丘特有の植物がいみじくもロマンの花を咲かせているのも懐かしい。最近サンドスキーや、砂丘ゴルフ場としてもクローズアップされている。

又砂丘につづく海岸線には、国定公園山陰松島と共に、因幡の白兎で有名な白兎海岸があり、海岸一帯はハマナス自生南限地帯として天然記念物に指定されている。新しく市域に入った吉岡温泉は、湖山長者の伝説を秘める風光明媚な池を南に一軒のところにあり、ラヂュウムエマチオン含有泉質として純粋な湯治場として親まれている。僕が帰郷して初めての温泉がこゝで、二三年前迄は此処に遊星青木君の実家があり、「のびてへんかと温泉を覗きに来　日満」の句が出来たのも今は昔の笑い話である。

次はバスでなと、汽車でなりと、お好みの乗り物により鳥取を発てば数分にして浜村温泉。松崎の東郷温泉と至るところ温泉ブーム。東郷には湖中の湯に浸りながら釣が楽しめる望湖楼その他十数軒の大旅館があり、湖上十分にして遊星君一族が営む浅津温泉が控えている。

上井（あげい）は鳥取県中心の繁華街で、ここには日本一。世界第二位を誇るみさき温泉がある。これは僕がまだ在阪中、ある学校での講義中に聞いたことで、これも我田引水でないことを自負している。温泉街みささは余りにも有名過ぎるので、どうかとは思うが、ここを喋らねば持駒が。いや、アワワ。最近ではあるが三朝温泉は国立保養所と指定も受け、年がら年中客の絶え間がない、春秋の行楽シーズンには余程早くから予約をしておかぬとお断りが多

いので、深見雅堂氏の句でないが「値切ったを云わずサービス気に食わず」ともなりかねないのではあるまいか。こんな事は滅多にあり得べきことでないのにと、この句を読んだとき非常に残念に思った。嘘だとおもうならこの五月路郎先生夫妻と歓談予定の会場後楽へ川柳大会前日お越し願えれば解って貰えること確実である。みささにはその外、陛下御巡幸のとき御一泊の岩崎があり、大橋と並んでこの三軒を三朝の三旅館として最高のものとしている。三者それ〴〵趣味を凝らしての建築だけに僕等では平素ちょいちょいなんて芸が出来ぬので、何かの機会を狙うのも仕方がなく、大会前日を特にサービス日として不朽洞会員諸兄多数のお越しをお待ち申上げている。

みささに比べられては少し見劣りはするが、その外関金に関金温泉があり、又国宝投入堂を持つ霊峯三徳山登りもいいものである。極く近いことで、ウラン鉱が発見され新聞紙上を賑わしているのもこの地域のことである。これから西は、米子の三鴨美笑氏の繩張りなので、僕はここらあたりで筆を擱くことにするが、富士山の落し子大山（ダイセン）と、皆生温泉のあることだけは書き添えておこう。

生活断片

長野文庫

四十がらみの婦人が絹モスの風呂敷包みを抱えて這入って来て「古本をお買いとるの広告が出て居りましたので持参いたしました」との切口上で、おもむろに取り出したのは教育学的社会学、教育心理学、学校教育方法論等々の大正、明治の教育学書数冊である。これ等の本は現在殆ど無価値で紙屑として処分する以外に途はないが、さて改って大事々々に持参したものに対して「目方でお売りなさい」とも云い兼ね又次に何か持って来て貰い度いと云う下心から、二三十円のものを百円出して買ってしまう、売った方は「あれを古本屋は三百円位に売るだろう」と内心思って居るかも知れない。

売る方は儲けさせたと思って居
又どうぞ機械のような声になり

「古本を売るから買いに来い」とのことで出向いて見ると堂々たる家構えである。案内を乞うと「座敷の方へ上れ」とのことで、座に通って一通りの挨拶あった後「別に売らねばならんことも無いが」「大阪の方の本屋も希望しとる」「図書館へ寄附してもよいとも思って居る」等得手勝手な話の末「高ければ売る」と云う、結局一冊ずつ値踏みをして買わされた。この場合気位負けして相場以上の値をつけたことは勿論である。

応揚の底に利剣を磨ぎすまし
かけ引の中に威圧と云うもあり

「僕は今 生活と設計 と云う本を読んで居るが、これはいゝ本だね、御承知の通り私も随分色んな本を読むが、こんな本は始めてだ、これは君も買っとき給え、絶対に売れるよ」散々賞讃をしておいて、さて二、三日してこれを売りに来る、この場合に先日の絶讃はかけ引だと充分分って居乍ら矢張り少々は高く買うことになる。

要らぬものつい買わされる先入主
だまされるのも商法の一つにて

こんなことを書くと古本屋は損ばかりして居る様だがそれでは食って行けない、時には案外な儲けもある。屑物買が「伊予史談」誌の三年分位揃ったものを持って来て「買って呉れ」と云う、この雑誌は一冊売で三十円位するし、一年分揃って居ると四百円もの値打があるのだが、心なき人が屑屋へ目方で払下げたものと見える、屑屋は一貫匁二十円程度で買って来るのだから恐らくこの雑誌も二、三十円で買って来たことは分って居るが、相手にも儲けさせてやらねば不可ないから二百円で買い上げてやると屑屋は大喜びをして居るが、これは本屋にとって有難い鴨である。

とは知らず屑屋有難たがって去に
古文書で知らぬが仏鼻をかみ

毎月一と六の日に古道具市がある。時々覗いて見るが中々旺んである。此市には古道具の外色んなものが出るが先達ても「今治市誌」が出たが、道具屋連中は古本相場に疎いから二百円、二百五十円など小刻みに競つて居るから私がうしろの方から五百円と云ったら即座に落札出来たが、これこそ金を只拾った様なもので有難い次第である。

ダイヤよりラムネの玉を大事がり
純毛も化繊も同じ生地に見え

テレビ

福田妄夢

さようでございますな。私どもの近くの店々にも、テレビが置かれはじめまして、喫茶店などはテレビがないと閑古鳥の鳴く仕末でございまして。不景気な風は、あまり変ることのない私どもの商売、風呂屋にまで吹きはじめまして、毎日銭湯へ来られていたお方は各日に、二日目に参られていたお方は三日目にと云う具合でございまして……、そこで私もひとつテレビでも置いてと考え、早速無尽を落して一台番台の上へ備えつけたのでございます。効果はたちまちで、だん〳〵お客様が増え始めたではございませんか。プロレスのある日などは千客万来とはこのことかとホクソエンだものでございます。

ところが、ところがでございます。この様にお客様が来られるにもかゝわらず、売上のほうはとんと増えんのでございます。寝床に入ってからは家内ともつく〴〵話し合いましたところ、あゝ、なんとしたことでございましょう。私どもの商売ではかえってテレビが邪魔をしているのでございます。テレビのない節にお客様がよく回転いたしました。いくら永湯の方でもせい〳〵一時間。早いお方なら二十分位でございましたのが、テレビを置きましてからは、お湯を上って来られる、何気なしにテレビを裸のまゝ御らんになる、体が冷えてくる、又お湯につかられると云う具合で、まあそんな方はよろしゅうございます。劇映画やプロレスのあります日ともなりますと、テレビ開始三十分から一時間前にいらっして入浴。それからゆっくりテレビを楽しまれまして改めて入浴という方々ばかりのため、当日はせまい脱衣場が押すな

押すなでございます。子供衆などは手に手に椅子を御持参でいやはや……。そのためテレビを目的としないで入浴にいらっしたお客様も、この時間にお出でになってこの人の群を御らんになるとわざわざテレビのない銭湯へ行って了われるのでございます。成程湯舟の方は割合空いておりますが、何しろ脱衣する場所が満員では無理もございません。あゝ！　と後悔しても、もう遅うございます。今更テレビも外されず、そこで近頃はちょい〳〵、

これは内緒でございますが、テレビの下へ貼り紙するのでございます。――只今修理中――と。

声

酒井ひか平

川柳大会で打てば答える作者の名乗りが無い程淋しい事は無い。

自分が苦心して作った句だもの、選に入ったら「何々」と声を張り上げて遠慮がある筈はない。熱と熱、盛り上る雰意気こそ、川柳発展の重大事である。

最近痛感する事はその声が貧相になったのでは無いか。

大阪市民川柳大会席上で、後方の若いお嬢さんが、すき通る様な声で、呼称されたが胸がすく程いい気持だった。

路郎先生の著にも此れははっきり記されてある。句会の雰意気を盛り上げる為には参加した全ての川柳人が心得る可き協力であり、自分の句への情熱をハッキリ表明して貰いたい。

柳界展望

▼本社二月句会は十一日（土）午後六時から下寺町市バス停前の光明寺で開催、奮って参会されたい▼客臘十二月廿四日午後六時から三休橋の中島生々庵居で常任理事の忘年会開催水入らずの人々とて、大いにメートルを挙げ余興続出中島博士秘蔵のテープレコードに収められ愉快な一夕であった▼南海電鉄川柳会句会は一月三十日午後六時半から粉浜親和寮に於て会催▼川雑阿倍野支部新春句会は一月十九日午後六時から西光寺で開催▼大阪逓信病院川柳会は一月廿一日午後二時から五階講堂で開催▼南区医師会文化部杏林川柳会は一月廿四日午後七時半から日本橋の放生居で開催、以上何れも路郎主幹出席▼川雑玉造支部（大阪市）一月句会は、七日午後六時半から白柳子居で開催▼大阪市交通局川柳会新春句会は十八日午後五時、同局病院五階サンルームで開催▼川雑婦人友の会（大阪市）総会は一月二十二日午後一時から本社で開催。会長麻生葭乃女史を始め、多数女流作家参集、今後の運営方針を決定、五時散会すると▲富柳会（富田林市）設立句会は、阿倍竜太郎氏の肝入で、一月七日午後一時から同市役所で開催、今後市公報に入選句掲載予定の由▼川柳甘茶新年句会（大阪府）は、十一日六時半から瓢箪町公民館で開催▼川雑堺支部句会は一月十八日午後六時から摩天郎居で開催▼川雑弓削支部（岡山県）新春句会は、三日午後六時から二葉旅館で開催▼川雑倉敷支部（倉敷市）十二月句会は、十八日午後六時から南中学校で開催▼川雑備前支部（岡山県）師走句会は、二十日昼から久米雄居で開催▼黄鳥電話局合同忘年句会（岡山市）は、十七日午後六時から日赤支部で開催▼川雑下関支部（下関市）末年忘年句会は、十八日午後六時から鉄道会館で開催▼葦川柳会（松江市）忘年句会は、二十日夜島根療養所診断室で開催▼三井造船川柳会（玉野市）忘年句会は、十二月十五日保育園で開催▼どんぐり会（岡山県）を岡山警察本部内に開設、十二月十日同部で句会開催▼川雑篠山支部句会（兵庫県）は一月八日十二時半から篠山町立町、池富旅館内関電寮で開催▼久米南川柳会（岡山県）創立準備句会は、一月二日午後一時から七面山居で開催▼333川柳会（堺市）は一月句会を十二日午後六時から島野工業会議室で開催▲川雑松江支部復興準備句会が十二月十八日に勝谷山川児氏等によって開催された▼川雑大原支部新年句会（岡山県）は一月十日午後一時から大原町中町公会堂で開催▼しなの川柳社（松本市）は一月廿二日浅間温泉滝沢本家で開催▼福富雷童画伯（広島市）は、郷里広島に原爆記録壁画製作の依嘱を受け、又仏舎利塔壁画揮毫を引受られ、広島市牛田町九六三に画室を移された▼福田清美未亡人（横浜市）は無事消光されていられる由主幹宛にお頼りがあった▼菊川泰平楽氏（門司市）は引揚後、苦闘十年、関門海峡を見おろす高台でクリーニング店を開業、奮闘の由。「金泥の迎春もよし支那恋し」の句信を寄せられた▼須崎豆秋氏（大阪市）は、郷里坂出市へ五年ぶりに帰省、八十六才の母堂に面接、「還暦を過ぎた息子へ餅をやき」の句信を寄せられた▼久保和友氏（滋賀県）は一月一日から伊豆湯ヶ島に旅行され、「火の国の旅は恋しき露天風呂」の句信を寄せられた▼立石忠雄氏（玉野氏）は左全摘という左の肺を全部切除する大手術をされ静養中の由経過の良好をお祈りする▼前川左文字氏（兵庫県）は篠山町東新町二一四ノ五に移転▼原牧童氏（河内長野市）病気全快、十二月末から河内長野市古野町九二に移られた▼池田可宵氏（長崎市）は昨年が最悪な年であったが本年は最良の年にするため努力されるとの通信に接した▼伊藤瑤天氏（東京都）は「川柳新報」並びに「観光川柳」のため不断の努力を続け柳界のため尽瘁されている▼第六回東川連初春川柳大会は一月十五日正午から東京都品川区二葉町一の四二七品川浴場会館で開催▼函館川柳社新年句会は一月十五日午後五時半から鶴岡町鶴友会館楼上で開催▼熊本川柳研究会では一月八日午前十時から熊本市手取本町、市中央公民館で新年句会を開催▼石川県津幡町興津在住の前田義久氏著、句集「慈雨」は金沢市大手町橋本雅文堂から出版、三千六百余句収録、美本、非売品。

（摩）

▼一月号一七頁石田沐天氏の句「功成らず流転の春のドヤの窓」と訂正

正　誤

小児科
内科
平尾醫院
大阪市南区日本橋筋二ノ七〇
電話　代一六四三番

花地物語

いのちある句を創れ

投稿規定 ▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月二〇日▼投稿先本社宛

本社忘年川柳大會（大阪）

十二月十七日　午後五時半　於光明寺

粉雪ちらつく、歳暮の十七日、恒例の忘年川柳大会は、遙々、京都の田中鳥雀、篠山の酒井ひか平両氏を始め多数の来会で、さしもの寺院の大広間も、狭さを感じる盛況である。北川春巣理事長の歳末挨拶は本年の柳界を顧みて、葭乃女史の福寿草、路郎師の至文堂からの著述出版は柳界に、大いなる貢献であったと述べ、路郎師は、自動車の運転と川柳を比較し、川柳作句も徐々に推敲に推敲を重ね、徐行的に向上を図るべきであると柳話され、馬車馬的柳人たらざる様注意された。「妾宅」「酒」の二分間吟に、雪月花句戦を争い、遂に、月組が一点をリードして、雪組を破り、各支部代表の支部対抗句戦は、新旧選手互に鎬を削り行司の路郎師に依って、名誉の優勝は遂に、帝化川柳会の佐野白水氏、準優勝は逓信病院の森下愛論氏の得るところとなった。次に席題、兼題の披講あり。当夜の不朽洞賞優勝カップ把持者は本多省三氏であった。閉会九時。

なお対抗句戦出場の選手は次の通り。

玉造支部（清子）みおつくし川柳会（梨花）杏林川柳会（比呂史）桜島支部（清潮）淀川支部（多久志）逓信病院（愛論）婦人友の会（登志子）篠山支部（ひか平）大鉄局支部（飄太）鶴町支部（胡蝶）阿倍野支部（恒明）京都支部（鳥雀）交通局川柳会（与呂志）池田支部（いさむ）堺支部（素男）帝化川柳会（白水）333川柳会（一楽）南海電鉄川柳会（雄声）第一回戦では白水、清子、恒明、梨花、素男、多久志、ひか平、愛論の勝。第二回戦では白水、素男、愛論、清子の勝。第三回戦愛論、白水の勝。最後に白水氏が優勝された。（摩）

出席者＝路郎・多久志・笛生・ひか平・一三夫・喜好・賀峰・十悟・静馬・茶仏・ひろし・黙平・紫香・いさむ・春巣・竜太郎・省三・雄声・淡舟・潮花・清子・登志子・文秋・牧人・薫風子・飄太・須賀太・生々庵・水客・都詩子・竹荘・丁路・梅里・清潮・たけを・葉光・古方・万楽・凡九郎・与呂志・栞・香林・愛論・みのる・摩天郎・蜃気楼・恒明・白水・井平・好郎・六竜子・愛二・白柳子・三司・貴蛾・没食子・晴芽・一伸・鳥雀・貴山・梅志・一楽・狂二・素男・小松園・比呂史・花香・たけはる・風間・貞句朗・へとち・一朗・春柳・葭乃・梨里

兼題「パパ」　麻生路郎選

パパさんと呼ばせて白毛染がいり　与呂志
理解あるパパで娘に見くびられ　蜃気楼
パパも毫生やしなさいと甘えられ　ひか平
パパチャンの耳引っぱって起しなさい　紀人
パーの隅めでたいパパになりきって　栞
パパの膝煙草臭さも懐しし　鳥雀
不景気にマダムあっさりパパを替え　喜好
もうパパに理解の出来ぬ本を読み　コンパス
一大事パパが年末呆けはじめ　ひろし
振り返るパパへモ一度いってらっちゃい　十悟
鼻唄もオーマイパパが出る若さ　文秋
社に出ればガラリと変るパパの顔　一滴
歌舞伎座の隅で見付けたパパの恋　喜好
不甲斐ないパパとは知らず頼りにし　丁路
退職のパパは母娘に邪魔にされ　みのる
パパ今夜酔うたんのと云うたっけ　与呂志
パパの肩揉んでやろかとイヤリング　水鏡子
パパに似て此の子もおしゃれで困ります　初甫
モーニング喪章がパパによく似合い　貴美
パパママで育ち聖書を手放さず　香林
パパはよせ隣近所と釣合わぬ　貞句朗
パパママと云うのを見れば下駄を履き　摩天郎
パパの嘘ママも真顔で聞いてやり　生々庵
ねえ「パパ」と云うはおねだりする始め　一伸
パパママとこんどの母は云えと云う　恒明
パパママとあまえて浮気して御座る　梅里
一寸丈けとパパに抱かせてコンパクト　井平
ほろ酔のパパの土産は寿司ときめ　須賀太
母あちゃんもおんなじようにパパと呼び　静馬
混血児パパを瞼に辛く生き　可十
パパ若し附録の育児篇も読み　春巣
うちのパパダンスはかりは逃げ廻り　比呂史
若禿げを云はず女給にパパでもて　日満
靖国の遺児人間のパパが欲し　笑路
今におき脛かちりでもパパはパパ　阿茶
パパ毫に黄な粉を付けて威厳なし　ひか平
自家用車パパは毎日帰らない　笛生
物ねだる時だけパパと云うて呉れ　省三
夜の茶漬パパは象牙の箸鳴らし　薫風子
酔うているパパはあみだに帽子着る　茶仏
パパ連れてママ八階から順に下り　香林
パパ居るかいとつぶやは眼で尋ね　賀峰
十二月パパと云われて油断せず　省三
外人へパパの英語ははかどらず　路郎

兼題「根気」　武部香林選

売込みも根気集金も根気　たけを
根のいる仕事で按摩代もとれず　素男
職人の黙って坐った小半日　愛論
工作の根気へ紅茶入れてやる　淡舟
バンクした車へ根気よくしゃがみ　梅志
どん底の暮しにくじを買う根気　いさむ
根気よく又やって来た片想い　喜好
飲む口へ妻が根気の手内職　狂二
麻雀をやらせば根気のよい社員　一楽
池釣りの根気のよさに鯉がまけ　ひろし
根気だけ賞めて仲人まとめる気　紀人
先輩が根気の徳を説いてくれ　飄太
蔭口はどうあろうともやる根気　恒明
バスを待つ根気同士の無駄話　万楽
にぎ／＼し魚籠へ寒さもない根気　笛生
神業に近い根気を妻は持ち　梨花
スローモの根気毛糸がほぐれゆく　潮花
添いとげるまでは根気で働く気　竹荘
若い衆に矢張り勝てんと腰のばし　須賀太
根くらべ負けた方から笑い出し　竜太郎

仕上りを賞めて根気に恐れ入り　牧人
パチンコにある根気を惜しまれる　雄声
繻い模様母の根気を懐しみ　鳥雀
商魂の根気に負けた置薬　省三
知らざりき恋にも根気の要るとかや　多久志
餌を運ぶ蟻の根気を見る根気　黙平
根気よく編んで着る頃頻が腫れ　阿茶
神主も四度目の見合とは知らず　初甫
運と根なめてた奴が家を建て　白柳子
此の上は根気比べと斗病記　六竜子
黙否権続けて妻の勝になり　丁路
仕立屋の根気見ていて肩が凝り　没食子
根気よくまだ買うている宝くじ　静馬
無駄骨に終った根気だけ買われ　一ッ十
もう根気おまへんねんさ子に頼り　登志子
根気よさ娘の意地も崩れかけ　文秋
根気よく訪ねあげくの果て約手　晨気楼
寝られたら損やと根気叱られる　茶仏
変人の折れるとこまでついてゆき　古方
待ち呆けなのに根気のいゝ煙草　薫風子
根気よく掴り取るまでを私服追い　雅堂
どんくさい腕を根気で埋め合し　十悟
押売りも根気負けした祖母の耳　たけし
根気よく待つ舞鶴に船が見え　都詩子
労組の根気師走のしみる風　摩天郎
保険屋の根気話題を変えて去に　紫香
年だなと思う根気の抜けた朝　三司
芹を摘む根気へたばこふかすだけ　梅志
この根気いつまで続く吾が暮し　清子
勧誘員根気三年靴二年　愛二
母強く根気のつづく手内職　葉光
根気しびれもう帰ります告知板　生々庵
根気よい稼ぎ高架の下に住み　賀峰
五十迄まだ続いてる美顔術　比呂史
左遷ばかりされても辞めぬ子沢山　梅里
雪落ちる音根のいゝ夫婦で居　水客
秀才が愚鈍の根気にしてやられ　一三夫
根気よく塗ってもしわの取れぬ顔　知恵美
根気よう積んだ積木の上へ倒け　小松園
黙々と牛の根気を月も知り　香林

兼題「払戻し」　菊沢小松園選

税務署の払戻しは手間がとれ　香林
急行の払い戻しで子へ土産　好郎
汽車賃の払戻しを雪がさせ　凡九郎
子の晴衣払戻しへ少し足し　摩天郎
飲むよりも払戻しと幹事きめ　阿茶
払戻しうちの人には行かせぬ気　初甫
判ベタリ〳〵払戻し暇が入り　紫香
払戻しの税は帰りにバーで消え　雄声
払戻しある程税金かけたお人好し　清子
急行券一分の違いで払戻し　たけを
手から手へ渡す穴場の紙幣のしわ　三司
払戻し嬉しい予算待って居り　都詩子
払戻しまたへそくりへくり込まれ　知恵美
税金の払戻しは妻知らず　須賀太
十円を残して淋しく局を出る　三司
夜逃げする日に全払い受けておき　春巣
払戻し地獄で仏と云う想い　恒明
払戻し結局呑んでしもうなり　同
払戻し出し合い又も飲み直し　清潮
御役所の払戻しに腹が減り　十悟
十円の払戻しに判が要り　梅里
お気をつけてと払戻し背できゝ　淡舟
預金尻払戻しに子をつかい　静馬
払戻し子供貯金に廻す母　黄蛾
拾円の払戻しはそっとうけ　みのる
払戻し欄はよごさぬ気で預け　茶仏
払い戻し無いかと念を押してみる　賀峰
払戻しの金もうれしい十二月　没食子
おかしさは払い戻しを先にのみ　栞
払戻しを得た様に飲んじまい　梨花
云い難い払い戻しは妻をやり　ひか平
駅長室払戻せに囲まれる　黙平
払戻しの分は子供の貯金にし　紀人
延着の払戻しは秘書がとり　いさむ
つんけんどんに払戻し呼びくさる　清潮
うたてけれ年末調整かぎつかれ　愛二
子の貯金払戻しの欄が白　万楽
払戻し一ン日棒に振らされる　恒明
急行延着払戻しで又おくれ　春巣
払戻しの判が違った十二月　万楽
十二月払戻しに手間がとれ　茶仏
まだ隅で払戻しが待たされる　喜好
払戻し出来まへんなとそれっきり　愛論
払戻し火も無いとこで待たされる　ひか平
正直を笑って払戻される　葉光

席題「割勘」　川村好郎選

割勘へちとすまない様に酔い　凡九郎
割勘の分はかっちり飲んでいる　一心
割勘となることは知らず腰を据え　素男
割勘と決ってからの宿多忙　六竜子
割勘という連名の御香料　一三夫
割勘と別に握らせずらかる気　生々庵
割勘がどうなったのか梯子酒　葉光
割勘と云うて妻をば丸めとき　雄声
割勘と聞いてじっくり腰をすえ　愛論
割勘をこまかく割った女連れ　文秋
割勘は財布へきっちり入れて出る　茶仏
割勘とは云わず飲むだけ飲ませる　雄声
割勘のいゝだしべいをたのまれる　古方
割勘の坐り直した恐ろしさ　ひか平
割勘で飲んで居るのに呼び出され　喜好
その内の一人割勘借りており　一三夫
割勘へほんとに財布忘れて来　水客
割勘で来ても課長の席をあけ　茶仏
えゝとこを見せつけチップは頭割り　好郎

席題「浮気」　水谷竹荘選

禿げて来てからの浮気ははばからず　笛生
浮気さへ出来ぬ男と見くびられ　省三
当分は浮気出来ない病床につき　須賀太
そんな時代もあるさ浮気きゝ流し　生々庵
その場かぎり浮気で済す旅の空　葉光
浮気の虫そろ〳〵起きる金が出来　文秋
浮気した女の親まで世話さゝれ　静馬
浮気でもしてやろうかとボーナス日　みのる
ちと浮気してほしいは妻の見栄　生々庵
浮気チクリと痛い事を聞き　ひか平
倦怠期浮気の虫を押えとき　黙平
浮気ふと映画のテーマ思い出し　ひか平
それとなく浮気封じの釘を差し　丁路
浮気する課長小唄や茶へ通い　梅志
殺すと云われても浮気ようやめず　梅里
蛇の道の浮気へ女将釘をさし　生々庵
年などで浮気はさんさマダム酔い　三司
新内が浮気の虫をかきたてる　梅里
使い込みから評判になる浮気　賀峰
湯の町で浮気ごゝろが出てしまい　淡舟
上役の浮気中途で座をはずし　紫香
ずる〳〵となった浮気が恐くなり　いさむ
浮気っぽい亭主に苦労絶え間なし　清子
酔うたんびちよい〳〵浮気するなり　一三夫
浮気する甲斐性もないと妻平気　みのる

酔いはよし一寸浮気がしたくなり　好郎
アルバムに親父の浮気色をかえ　竜太郎
腹いせの浮気の相手見付からず　ひか平
辻褄が合わず浮気を感づかれ　十悟
初めから浮気と知っている浮気　黄蛾
妻の座をおびやかすでもない浮気　多久志
浮気もう公認にしてあっけない　愛論
惚れ切って浮気と言わぬ恋にぶち　潮花
妻よりも二号の方がやく浮気　竹荘

雪月花句戦「酒」　市場没食子選

下戸とは知らず酒持って行き　登志子
職人好酒飲んで益々腕が冴え　暦気楼
ボーナスはふところにあり梯子酒　万楽
ヒル酒の味も覚えた行状記　愛論
初電話向うもまわっているらしい　栞
酒の座がすんでにごった窓を開け　賀峰
焼酎でんがこカットグラスのセットなど　古方
明日も又働く糧のコップ酒　都詩子
禁酒して肴も一つ減らされる　静馬
二級酒に社長盃伏せたまゝ　茶仏
酒飲めばフン〳〵〳〵と買ってやり　白水
聞き合せお酒のことをまず聞かれ　いさむ
酒一本提げて新婚邪魔しに来　一三夫
酒好きな奴であったと三回忌　みのる
独り発つ酒がこぼれた朝の色　水客
かくし芸酒も出さずに出せと云い　梅里
一合で酔えるお酒をよろこばれ　三司
酒くさい息に宵寝を起される　恒明
十二月酔わないように飲んで来る　葉光
極楽も地獄も酒の後になり　井平

雪月花戦「妾宅」　清水白柳子選

アパートに居ても妾宅と云われ　淡舟
妾宅で腹を立てない主義と云う　春巣
妾宅を出て駅迄のてれくさゝ　貴山
妾宅で朝のお経を缺かさない　水客
社長の留守妾宅へ聞きにやり　登志子
妾宅の前は静かに水をうち　いさむ
妾宅へつわり薬がとゞけられ　古方
妾宅へ行くには自家用車に乗らず　竹荘
妾宅の方へは遺産かくしとき　文秋
妾宅へ電話をかける役になり　賀峰
妾宅へ行く日土産の約束し　香林
妾宅の子に級長をしてやられ　一三夫
妾宅に電気が消えてたともり　梅里
妾宅に毎日来てるとなりの子　たけはる
妾宅の犬になつかれてる社員　梨花
本宅でもまぜ妾宅でもんでやり　省三
妾宅がとなりに出来て妻気にし　ひろし
妾宅へこんどは眼鏡忘れて来　三司
妾宅へ巡査足音立てゝ開け　梅志
松植えてからが妾宅らしく見え　白柳子

雑川　**淀川支部句会**（大阪市）

武部香林報

レントゲンもう安心と云う眼と眼　茂夫
新設のレントゲン科を派手に書き　曲蝶
退院はまだ〳〵とレントゲン　東洋男
レントゲン祈りをこめて台に立ち　近藤
レントゲン予感になり手を引かれ　若葉
不足税払えば中味意見なり　文平
手荷物にならぬ中味を指摘され　香林
いつ買った口紅なのか療養者　志津子
療養の或日口紅つけて見る　発中
暦見て易者のような口をきき　草白
ストライキそれは暦にも無い行事　貞句朗
息子のレヂスタンス暦を否定する　清子
誕生も暦の上は三りんぼう　風間
早や来年のこよみかと気ぜわしく　一栄
お寺からお盆に乗せて暦が来　登志子
眼鏡かけて大安さがす孫のお目出度　一正
初雪に暦炬燵へあけたまゝ　梅志
それだけは暦に頼る母の智慧　白柳子
良い智慧も湧かずカレンダーは早の師走　六竜子
式終りすぐ脱いでいる借りた足袋　ひろし

雑川　**篠山支部句会**（兵庫県）

小西無鬼報

録音の声に表情さえ浮かび　民子
録音にマンボ姿はあらわせず　小菊
引揚の録音むせび泣くばかり　初穂
録音のニュースは地図を拡げさせ　徒然
公開をすることは知らずついしゃべり　愉多可
街録に血の気の多いやつばかり　洋牛
街録の溜りひき人ばかりなり　喜天
録音で鼻息強い京を知り　越山
録音の歌で開幕待たしとき　抜葉
介抱のつかれ忘れる退院日　村雨
介抱を頼んでおいて破目外し　ただし
介抱が身内になって無理が言え　凡志
介抱に行けぬ苦労の身を憂え　無聖
騙されるぐらい覚悟で介抱し　芹花
プロポーズやっぱり恥をかいたなア　若葉
申込用紙はみんなメモにされ　吉野
春よ春妻も月賦へ申込み　一雨
本日の求職俺のとこで切れ　英断
こぶつきでまあ心臓の申込み　左文字
申込み宣伝程は集らず　ひか平
行儀よいだけで発言一つせず　鈴江
ズロースは行儀の悪い娘にし　梅枝
三つ指をついた行儀へどきまぎし　文平
正座するにわか仕込みのモーニング　白猫児
御茶席へ通り御行儀とは見えず　無鬼

雑川　**貴生川支部句会**（滋賀県）

貴瀬美秋報

母屋まで人に貸してるわび住居　迷羊
差引零預金帳にも見はなされ　凡骨
安静の子へ台所気を配り　美秋
すき焼に後輩の箸そっと出し　可十
舞扇よいお身分と云われたり　斗志
仲直り上べは叔父の顔を立て　四苦峯
台所の狭さも馴れた新世帯　文子
台所で立食い出勤五分前　夢生
台所昨夜のまゝの日曜日　喜遊
へそくりの預金帳は持ちあるき　俊子

雑川　**京都支部句会**（京都市）

田中烏雀報

信州の支線へ乗り替えピッケルの　光二郎

季節一品料理
江戸前にぎりずし
アベノ橋地下映画食通街
梅里の店　大萬
☆大万川柳（第六十回）を募る
兼題「我が家」路郎先生選
締切・二月十五日（句数五句以内）
発表・二月二十一日（誌内掲示）
投句は　阿倍野区松崎町三丁目
一〇　大万川柳会宛

善光寺冥土へ近き人の群　親生
信州へ抜ける小道をくすり売り　輝雄
妻の頭文字が出て来る日記閉ず　あきら
理に合ぬ阿呆正直に興奮し　九角
方便にしても興奮かくされず　司郎
双眼鏡スタートの馬そろわない　豊次
雌犬の方へ人間引っぱられ　鳥雀

雑川　**鳥取支部句会**（鳥取市）
河村日満報

整理案噂の中に僕も居り　正
耕地整理あのみぞ迄が俺のもの　敬一
病人ということ忘れる日本晴　天保銭
上役への助言は鼻であしらわれ　多可志
片づけた部屋もう一ぱいの玩具函　小松
新米のアナに助言をしてるメモ　幸
退職の机きれいに整理され　節子
女房の助言が母の気に入らず　隆規
だん〳〵と助言なくなる敗将棋　月光
婦人部はお茶とお菓子で忘年会　三歩
頼まれた端書ポケッに忘れられ　耕民
寒い風なのに約束だから待ち　粗粒
幸福をうっかり忘れて居た暮し　遊星
忘れてた古疵に触れ夜の長く　湖山
栄転のデスク嬉しう整理する　芳道
私用電話ダイヤル遠慮して廻り　若人
喝采へせりふ度忘れしてしまい　日満
整理して雲の流れる窓に立ち　八歩

雑川　**木次支部句会**（島根県）
藤井明朗報

縄のれん風邪吹きとばす気でわける　綾美
年忘れ今年の無事を酌み交し　柳心児
珍客に赤字続きの家計なり　十宝
素通りへなじみの犬が追っかける　清夢
素通りの客へマイクが呼びかける　緋文字
素通りを女の声が振り向かせ　明朗

雑川　**米子支部句会**（米子市）
三鴨美笑報

誘惑と知らず素顔の娘がきれい　水鏡
何もかも承知で乗った高級車　白堂
誘惑の一度はされてみたい顔　庄次郎
酒を飲むことは似るなと子をさし　十樹路
性格に似てちぐはぐな字を笑い　紅帆
声色にほんとのトニー顔負けし　節枝
人様の着るアイロンに夜を徹し　雄々
アイロンをかけ〳〵恋のコース練る　新雪
やりくりで越す正月を子は知らず　美笑
誘惑をのがれた顔が美しい　康江
誘惑に負けて多情な女悔い　庄太
似でもよい親の癖まで子が似てき　素飄
似も似たり我が子ながらの出臍なり　青香
井戸端の智慧がやりくり教え合い　一机
誘惑をせゝら笑って女酔い　詩郎
誘惑を夜空の星がみつめてる　君枝
人妻の誘惑ぜんざい食ただけ　八糸
誘惑と知って女中は気をきかし　無閑
亡き父へ子の姿まで瓜二つ　定男
人相が犯人に似て怪しまれ　尚子
二代目も親によく似て禿上り　菊女
アイロンの形に畳こげつかせ　風車
アイロンを襟だけかけて独り者　なぎさ
社交人だからやりくりまかせとき　すすむ
大年増誘惑してと笑いかけ　素生
誘惑と知りつゝ行くと決めており　ますほ

雑川　**備前支部句会**（岡山県）
浜田久米雄報

奴だこ買って満足した寝顔　綾女
無雑作に言うたお世辞がお気に召し　三六
まだお世辞つゞく敷居をまたいで出　久米雄
口下手のお世辞顔色見てつまり　東岸子
田舎出と知られたくないイヤリング　秋月
イヤリングだけはゝス日本と同じもの　与詩雄
イヤリングして家出した娘が帰り　伊久野
イヤリングお供の方が嬉しがり　幸仙
常連へお世辞もいわずよく儲け　操
酔いつぶれお世辞上手にかえされる　娯句楽

雑川　**倉敷支部**（倉敷市）
田垣方大報

体臭のカクテルに酔う満員車　千容
愛情の表現意地悪して見たり　方大
誤読して代理涼しい顔で去に　同
本物の襟巻犬に吠えつかれ　万古
脱いでそと持って来たなと質屋嗅ぎ　春也
歳の市金持て来いとサンタ行く　春日
満員車アリヤリヤ衿巻ずっか行き　五茶
その決意君まだ若いと馬鹿にされ　一念
効果的姿態鏡でたしかめる　一善
衿巻のはしをうどんがちとぬらし　越鳥
喝采をあびる吾子に母は泣き　十九一
衿巻を探しに歩く梯子酒　千代春
慈善鍋横目で通る銀狐　亀庵
決意する迄の苦斗を省みる　麗水
流行の衿巻買えた米の出来　風の子
廻り道して意地悪に又出逢い　清子
意地悪と思えど愛を感じる日　まり子
決意した心に空の気持よく　明心
失業を妻も気にする師走が来　耕水
越年の資金をねだるストもあり　暁松
拍手してふと反対の瞳に射られ　承平
ゾッとする話へ衿巻まきなおし　三六
万引をすなと掛けたる大鏡　弼次郎
衿巻を膝へたゝんだ応接間　斜木
喝采をされてつまずくかくし芸　桂月
隣席もお義理と見える手をたゝき　天風
その決意読めた手紙に手がふるえ　可笑
ニコヨンに出ても女と云う匂　狂風
録音機誤読のまゝで巻き取られ　万坊
母の気も知らず連れ子は意地を張り　実穂
喝采をされる仮装は念が入り　飴ん坊
誤読だと済ましておれぬ兜町　泥魚

雑川　**大聖寺支部句会**（石川県）
野村味平報

或る時はにらみをきかす世話もする　酔羊
世話人の中へ無断で名を借られ　光郎
世話しすぎ抜きさしならず困る母　寿子
反省は遺産を呑んでしもてから　桃園
時折は猿の声きく鳥番屋　とよ
反省のいつか無口の日が続き　味平
反省をすれば悪夢の様な過去　恒雄

雑川　**高知支部句会**（高知市）
大西迷窓報

初雪へ無理矢理父も起して来　佐智子
母さんのへそくり嬉しい餅になり　ひで子
取って置きの包の紐が用を足し　門田
ここからはおんぶしたらし雪の道　徳三文
隣県の雪を運んで汽車はつき　直喜
とって置きの金へ手がつき長病い　そよ子

積る雪積る話の囲炉裏端　俊一郎
ここからが一人になった雪の跡　梅林
初雪は爛出来ぬ間にとけ始め　玲羊
見栄はって乗った二等で退屈し　とし子
点線でふくみ持たせた文が来る　康平
あこがれの白線を出て職がなし　蘇水
八度線越して朝顔余所で咲き　己
幼き日柱に残した脊くらべ　由紀子
入選画合点の行かぬ線と色　み舟
長屋では長屋の見栄でにらみ合い　蚊弔
見栄はってのっぴきならぬ破目となり　庄吉
見栄を張るには近所豊か過ぎ　一周坊
PTAこゝにもいやな見栄があり　滋子
借金をしてまで見栄を張りたがり　正哲
母さんの見栄が揃ったPTA　寛
利子だけでゆるしてくれぬ十二月　耕生
バンザーイ水平線に故国浮く　海鳥
子の願いサンタクロースになってきゝ　道
暦からのけておきたい十二月　武幸
慈善鍋こちらが欲しい年の暮　正己
友達に逢うたばかりにロース買い　俊江
網渡り命をかけた笑顔をし　のぼる
泥酔のお詫びへ見栄も少しまぜ　迷窓

大阪通信病院川柳会（大阪市）

森下愛論報

仲居までして育てたに育てたに　みのる
信心に凝って余生を白袴　没食子
金、金、金、余生を金にとりつかれ　みのる
愛されて愛して余生まだ老いず　竹荘
うたゝねの生返事へ母着せてやり　ハナ子
生返事フンフンとにえ切らず　水楓
くど〳〵と駄目押されてる生返事　方正
徹夜する机に母は炭をつぎ　桃村
徹夜するカバンの底へウィスキー　鬼風
一番雞聞いて徹夜のペンを置き　夏生
歳頃が器用に脱いだ脱衣籠　斜水
時間表器用に繰って旅なれる　史葉
無器用な手付きで父がボタン付け　幸男
酔客の無理を器用に捌いて居　鴨水
駅前の街録汽車の音もいり　草右
駅前に来てから彼女ぐずり出し　愛論
駅前に飲屋一軒新開地　峰春
駅前で会うことにして気が疲れ　春巣

みをつくし川柳会（大阪市）

戸田古方報

誓っても守れぬ人へ又誓い　公子
歓迎会古狸みなよいつぶれ　久子
歓迎の総決算は官費なり　繁雄
歓迎のアーチを犬がくぐり抜け　凡九郎
アベックへ夜警もチョイと横を向き　恭世
遠吠の犬が夜警をびくつかせ　葉光
火の用心芝居もどきで云うてみる　宏
小供の夜廻り犬の家さけて行き　清恵
父ちゃんの夜警愛犬つれて行き　繁雄
肥太りになって夜警は家を出る　圭水
お土産へ無理矢理させる御挨拶　夢人
挨拶にどぎまぎとして頭下げ　のぼる
指一本あげて挨拶しまいなり　歌
朝夕の挨拶もせぬアプレの娘　保
一人だけ云うお忌みに頭下げ　玄武洞
斜陽族らしく挨拶ゆきとどき　古方
無軌道の若さも良しと思う年　凡九郎
判ベタ〳〵並べお役所の仕事　夢人

阪東ベルト川柳会（神戸市）

飯尾寄与史報

ボーナスを勝ち取るほどの肚はなし　柳坊
小使いにならぬボーナス妻に出し　村雨
ボーナスの端数あまだへ手出しする　比加留
ボーナスをあっさりくずす独者　寄与史
クリスマスオールナイトで宣伝し　三平

おたまじやくし会句会（天理市）

菱田清秋報

税金は仇以上に憎まれる　糸潮
十二月ストストストで明け暮れし　白連
十二月宣伝カーがせわしくし　花鶴美
督促の税吏の身にも同じ暮れ　凡平
宝くじ買う気になった十二月　満秋
十二月なんと子供に長い月　福陸寿
事始め一年分の頭下げ　奈良子
河豚鍋の灯りが恋しい十二月　季生
二次会を待たず終電出てしまい　隼平
恐妻と云われ二次会行く気なり　蛾灯
温泉のマーク二次会くづれ待ち　梅林
二次会に別れて夜空なお寒く　三平

城東村青年団川柳倶樂部（兵庫県）

出口白猫児報

会計はインク代まで請求し　秋峰
宣伝課クイズの答山と積み　茅花
合同の党名分裂の相があり　竜山
野良で寝た子供へ愛の上着脱ぎ　功
出稼へ霧の我が家をあとにして　正一
出稼に行って判った親の味　とよ子
冬眠の故郷に遠く酒づくり　白猫児
出稼を戻れば若い父となり　宗兵衛
まあ聞けと酔った元気で話しかけ　昌三
腕よりも口の上手な精農家　夢洞

富柳会句会（富田林市）

阿部竜太郎報

新婚の部屋のスリッパ行儀よく　知光
アベックも特売場の人となり　吉田
アベックで来てアベックの多いこと　水晶
行きくれてアベック泊る宿もなし　岸
離別とも見えずアベック裁判所　竜太郎
そばにいる親父がじゃまな電話口　滝声堂
声ほどはかしこまってない電話口　紙谷
お鏡で神の位が区別され　白柿
若旦那に電話のかゝる先斗町　摩天郎
餅やいてすましておけと二階借り　天野
初風呂は謡い初めのけい古場所　足立
初風呂を出たが着換えのないやもめ　弼酒
泣いている子のあがらない凧の糸　中山
葛城をのの字にまいて凧おちる　水晶

公・私・雑・記

★賀状を沢山いただいたことを先ず心から感謝したい。こちらからも差上げる筈であったが暮に賀状を刷らひまがなく、ひまが出来たらもう印刷屋が刷って呉れなかったので誌上の挨拶でゆるしていただくことにした。私たちにとって賀状は決して虚礼ではないと思っているので何等かの方法で賀状に代るものを差上げたいと思っていることだけでもお伝えしておきたい★各地で降雪の被害が相当にあったようであるが、川柳家にも被害があったのではなかろうかと案じている★本年は雑煮を祝うとすぐに、元旦から選句にかかった。郵便局の人達も、電車の人達も元旦から激務をやっているので元旦から働いたからと云って自慢にはならないが、選句の洪水はいささか、しんどくないこともない★本年はウンと名句を寄せていただきたい。川柳家の使命はなんと云っても生命のある句を創ることである★別記「社告」でお知らせしたように本号から誌代の値上げをすることにしたが、本誌は何処までも営利を目的としていないので、値上げしただけは本誌の内容充実に当てる所存であるから御協力御支援の程をお願いする★昨年ひそかに企画され準備中であった不朽洞会の句集がいよ〳〵本年は刊行されることになった。多忙な私が再選の労をとることにしたので多少時日はかかるが、出来るだけいいものにしたいと思っている。これまた会員は元より会員外の御協力を切望してやまない。詳細は追って発表することにしたい。（路）

不朽洞会から

▼中島生々庵博士（大阪市）御夫妻主催の吉例の「路郎師夫妻を囲む」新年会は常任理事も招かれ、一月一日の午後二時から三休橋の生々庵居で開宴され常任理事会の忘年会でテープレコードに収められた余興風景を発表、美妓を配し歓をたすけ、隠し芸続出、最後に春巣理事長の発声で不朽洞会の万歳を三唱し、路郎師御夫妻の健康と柳界の隆昌を祈って午後九時散会▼阪田良坊博士（下関市）御夫妻のパール婚式句会は川雑下関支部主催で十二月十八日鉄道職員養成所で盛大に開かれ、席上での「人生へ今日を影んで再出発」の感想吟を寄せられた▼大西八歩氏（鳥取市）からのたよりによると、本年開催の山陰川柳大会準備中のため目下多忙の由であるが本社の新春句会には出席されると▼土井雷山氏（岡山市）は今回、衆望を荷い川雑岡山支部長に就任、益々柳界の為め尽力される事になった。なお、浜田久米雄、津田麦太楼両氏は同支部の顧問に何れも推薦就任された▼篠山快夢起氏（ホノルル市）は、夫人同伴三ヶ月に亘る祖国の観光と視察を了し、二十五年振に眼に映じた母国世相の変り方に、今昔の感に堪えないと来信、滞日中の厚意を感謝すると謝意を本社に寄せられた▼不二田一三夫氏（大阪市）からの消息に依ると、標語の正月大会に「川柳塔へ総出句」と出題。入選句に対し賞金を副え本誌を贈呈された由▼若本多久志氏（大阪市）は一月十五日夜、路郎師御夫妻と川雑淀川支部長の香林氏を桜ばしの浜吉に招かれ新年宴を催し労をねぎらわれた▼上田翠光氏（奈良県）は十二月十八日開催の奈良県香久山蓮台寺で開かれた大和雅談会で久々に、路郎師に逢われ、今後大いに作句するとのこと▼菊沢小松園氏（大阪市）三女寿々子さんは十二月二十五日亡くなられ二十六日大阪市阿倍野区王子町の自宅で告別式執行、本社から路郎師始め香林、梅里、淡舟、白柳子、文蝶、生々庵（令息代理）、栞、紫香、水客、氏等列席、謹悼。「厳然たる事実の前に人間の小さし」の弔句は愛嬢を偲ぶ情切々、真に胸が打たれる▼正本水客氏（大阪市）母堂から刀自が十二月廿二日長逝され、二十三日東住吉区湯里町の自宅に於て告別式執行、本社から路郎師始め、春巣、生々庵、香林、潮花、淡舟、紫香、栞、杜的氏等多数参列焼香された。享年七十五歳。謹悼▼藤本満年氏（東京都）は客年十二月二十七日の株主総会で山陽新聞社取締役に選任。従来通り東京支店長を続けられ、正月四日間は初ゴルフやら年賀の往来に多忙、五日から大いにハリキッて勤務されている由▼直原七面山氏（岡山県）からのニュースに依ると岡山県警察本部内に、小田警備部長を、文化部長に、七面山氏が短歌、俳句、川柳の三部門の文芸班長に、川柳どんぐり会を結成、機関紙発行、県下警察川柳の為に努力されていると▼藤本茶々氏、延原忠美氏、岡本緑風子氏、三枝一筺氏は何れも家庭の都合で十二月限り退会▼多年待望、昨年ひそかに企画されていたわれ〳〵川柳不朽洞会員句集が愈々本年の春、上梓の運びとなった。句集収録希望多数に上り目下路郎先生に御選句を頒わしているが、出来上れば、稀に見る優秀作品の豪華版となろう、期待されたい。なおその後の新会員にして登載希望の会員は、至急本会へ申込み、再び来ぬ千載一遇の本句集に名を連ねるよう、御勧めする▼私は一月七日午後一時、富田林市文化連盟詩歌部主催の同市役所日本間に開催の川柳句会に招かれ、一時間に亘り川柳について講話、同市教育長、連盟会長、高等学校校務主任、市長秘書室長、保護司、公民館干係等各方面から参加、市助役さん迄も作句、文化向上と、チームワークの為め、非常な力の入れ方であった。（摩）

新会員紹介

一月

善木川千鳥（岡山県）正　七面山氏推薦

三村柳風子（岡山県）正　久米雄氏推薦

勝谷山川兒（松江市）　緑之助氏推薦

社告

誌代値上げに就て

本誌は日本独自の短詩川柳の発展向上に資するため、極力内容の充実と誌代の低廉をモットーとして刊行して来たのであるが、更によきものにするためには現在の誌価では到底不可能なのでここに値上げを断行することにしたので御諒承が願いたい。尤も愛読者の方々から値上をしても一段とよいものにせよとの要望があったので遂に意を決し値上げを断行すると同時に紙質を改良して本社の誠意を披瀝することとした更に〳〵内容の充実に邁進することを茲にお誓いする。

誌代を本号から一部五〇円送費四円とする。半ヶ年三二四円（送費共）一ヶ年六〇〇円（送費は社の負担）

川柳雑誌社

川柳不朽洞會

指導 麻生路郎　木村孤浪　戸田古方

賛助 池沢白翁　西尾栗　長谷川一徹　市場没食子　中田守雄　土井文蝶

―維持會員―

白川明吉　寺井鋭々　中村祐吉　高沢一浪　高安六郎　古川魔花麗　田中辰二　内藤草一郎　岩崎愛二　三輪晩翠

洞友 鳥山一歩　大坂形水　井上湧三　水谷竹荘　姫田夕鐘　沖野岩三郎　木村千容　亀井花童子　宮田不二　吉田圭井堂　田村孝之介　西垣錦風　杉谷湖山　山本雨迷　福本翩骨　川村好郎　増田耕民　安川久留美　築山快夢起　国弘半休　山路閑古　市岡暁舟　佐野卜占　前田伍健　三鴨美笑　小沢史葉　柴谷宰二郎　小西無鬼　蛭子省二　藤本満年　大鶴喜由　麻生葭乃　前山北海　吉田斜水　高鴛亜鈍　吉田水車　大森娟句楽　橋本緑雨　―正會員―　山口秋花　長谷川三司　沢田四郎作　大西八歩　小林文月　若林草右　東野大八　石曾根民郎　亀山晴峯　足立春雄　政田大介　高橋操子　川口秋香　谷野花蜂　石居高志　池田古心　岡田青果　新岡回天子　笹野旭泉子　千田凡童　戸田喜楽　近藤青柳　高崎雄声　吾郷玲人　若本多久志　下山清潮　永松東岸子　善木川千鳥　三村柳風子

不朽洞会員

―特別會員―

中島生々庵　丸尾潮花　飯降白香　浜畑胡蝶　稲葉鳩花　藤井明朗　土井雷山　奥村丹路　北川春巣　西辻竹青　阿形一杉　戸倉普天　石井白面人　長野井蛙　阪田良坊　本田恵二朗　野田素身郎　上田翠光　布施筑川　林野甦光　石川侃流洞　真鍋一飄　安原斜木　尾崎方正　桜川不水　間島青丹子　浜田久米雄　好崎申仙　上田春柳　淵貴山　菊沢小松園　森下愛論　牟田一哲　太田良子　河村瑞川　南柳田中鳥耕　清水白柳子　岸　佐野白水　松江梅里　藤原虚水　小川恒明　直原七面山　益永貞女　尾野おさむ　多胡春洋　木村十悟　児山紫郎　川端鬼酔　山川阿茶　飯島二桂　伊達堰子　若園横寿　岩島雄歩　坂田東洋男　志水礼司　小池しげお　不二田一三夫　岩崎一仲　竹内圭三　酒井ひか平　船曳呑張　藤井春日　平尾太希志　海野比呂史　木口賀峰　深見雅堂　松下京一楼　津秋六花　小西雄々　野村初甫　金井文秋　大橋游子　近藤青柳　戸田喜楽　笹野旭泉子　新岡回天子　若本多久志　池田古心　岡田青果　吾郷玲人　千田凡童　下山清潮　永松東岸子　善木川千鳥　三村柳風子　阿形一杉　戸倉普天　石井白面人　布施筑川　林野甦光　石川侃流洞　真鍋一飄　安原斜木　勝谷山川児　阿形一杉　戸倉普天　石井白面人　布施筑川　林野甦光　石川侃流洞　真鍋一飄　安原斜木　勝谷山川児　吉形苑女　松川杜的　片山巷雨　矢吹日出雄　菊田いさむ　永藤彌平　神谷凡九郎　森本法泉子　村上ゆづる　永田六竜子　馬場夢生　安岡珊枝郎　捨舟　南　柳田耕民　福田妄夢　河村日満　山田鳥荘　後藤梅志　水礼司　無尽　水本　田代尋四　黄瀬美秋　山本葉光　尼　新川博也　緑之助　大坂形水　井上湧三　弘津柳慶　福島鉄児　田垣方大　那谷光郎　長尾越鳥　佐藤千代春　木口賀峰　松下京一楼　津秋六花　小西雄々　野村初甫　金井文秋　大橋游子　近藤青柳　戸田喜楽　笹野旭泉子　新岡回天子　若本多久志　池田古心　岡田青果　吾郷玲人　千田凡童　下山清潮　永松東岸子　善木川千鳥　三村柳風子

募集

課題吟募集

肩洗濯機（廿句以内）　山根白星選

帯（廿句以内）　森下愛論選

（二月二十日締切）

ニュース（廿句以内）　浜田久米雄選

（廿句以内）　増田耕民選

（三月二十日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句以内）　麻生路郎選　北川春巣選

川柳塔（雑詠）　麻生路郎選

文章（評論・研究・感想其他）

（毎月二十日締切）

投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▲『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。

▲『課題吟』は誰でも投句が出来る。

▲『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

Printed in Japan

B列5号　毎月一回一日発行

川柳雑誌　第十一卷　第二号

定価　五〇円（送料四円）

半ヶ年　三二四円

一ヶ年　六〇〇円

（禁轉載）

昭和三十一年一月廿五日印刷

昭和三十一年二月一日発行

大阪市住吉区遠里小屋代西五丁目二五番地

印刷兼発行人　麻生幸二郎

大阪市住吉区遠里小屋代西五丁目二五番地

発行所　川柳雑誌社

電話　住吉㊟六〇八一

振替口座　大阪　七五〇五〇

行發日一月二年一光和昭・本講刷印日五廿月一年一光和昭　（行發日一回一月毎）可認物便郵種三第日一月七年二廿和昭

THE SENRYU ZASSHI

NO・345

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

大阪・名古屋・伊勢を結ぶ…
近鉄特急
座席指定・ノンストップ

大阪—名古屋　2時間48分
大阪—宇治山田　2時間
名古屋—宇治山田　1時間40分

大阪上六発		名古屋発		宇治山田発	
7.40	15.40	8.00	16.00	8.47	16.47
8.40	17.40	9.00	18.00	9.47	18.47
11.40	19.40	12.00	20.00	12.47	20.47
13.40		14.00		14.47	

本社　大阪市天王寺区上本町6
近畿日本鉄道

眼のないはなし
HORAI
パパもママも　ホーライ党
広東料理
蓬莱
大阪　なんば

高血圧を忘れよう！
サーピナ錠
1日1～2錠で高血圧の苦しみを忘れるサーピナ錠！成分含量も多くてお得です
山之内

スマートで着心地のよい
O.S.Kのレディメード
株式会社　大坂商店
大阪市東区船場一丁目三番地
電話東(94)1945・4463番

新潟縣佐渡郡畑野村目黒町

円四料送　圓拾五價定　誌雜柳川　號五四三第